

大西教授の思出

1925



小樽商科大学附属図書館



0002032961

5/7

136

3296

カ国以下 = 取扱 ~~...~~ 決断 今
 輝光輝光 永遠の 祝の 希望 = 30
~~...~~ 如 ~~...~~ 絶對的 善 ~~...~~ 得
~~...~~ 如 ~~...~~ 制 ~~...~~ 如 婦
 ... 得 ... 切 = ^{目的} 之 ~~...~~ 完全 ... 手
 目的 ... 切 ~~...~~ 手
 如 ~~...~~ 如 ~~...~~ 手 ~~...~~ 手
 Anotole 言 ~~...~~ 手
 如 ~~...~~ 不可 ~~...~~ 手 如 ~~...~~ 手
 集 ~~...~~ 手 ~~...~~ 手 ~~...~~ 手
 手 ~~...~~ 手 ~~...~~ 手 ~~...~~ 手
 有 ~~...~~ 手 ~~...~~ 手 ~~...~~ 手

5/7
1136

内容

遺稿

ストラスブルグ引揚の記 大西猪之介……2

思出

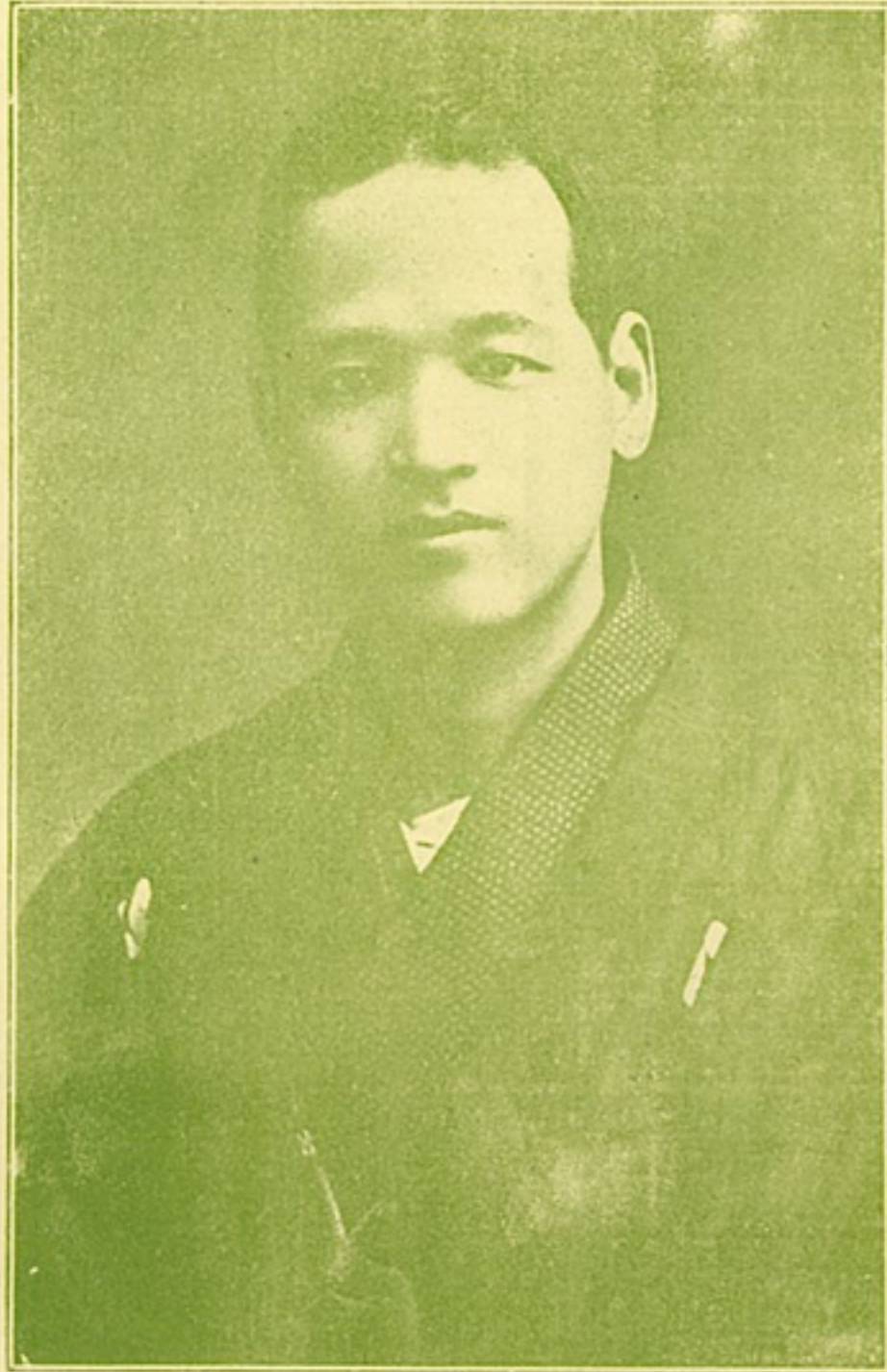
東京	阿部芳治…	…	…20	函館	相澤正義…	…	…32
札幌	出口豊泰…	…	…27	東京	福田徳三…	…	…26
同	L. Frank…	…	…31	小樽	早川三代治…	…	…32
小樽	平尾丹治…	…	…37	同	橋本博介…	…	…40
神戸	丸谷喜市…	…	…42	東京	松村光三…	…	…43
小樽	松田 新…	…	…45	小樽	南 亮三郎…	…	…46
同	村瀬 玄…	…	…51	同	室谷賢次郎…	…	…56
下ノ関	三田村俊雄…	…	…52	同	宮崎省三…	…	…60
東京	西尾清一…	…	…61	東京	小尾範治…	…	…65
小樽	R. M. 生…	…	…66	京都	佐藤光一…	…	…75
神戸	坂西由藏…	…	…63	東京	左右田喜一郎…	…	…87
札幌	佐藤正雄…	…	…72	小樽	關 與三郎…	…	…85
大阪	關 一…	…	…81	名古屋	高島佐一郎…	…	…90
小樽	高田治作…	…	…98	東京	津村秀松…	…	…81
紐育	上野福三郎…	…	…100				

ABC順

筆蹟……………凸版 肖像……………銅版

小樽商科大学附属図書館

0002032961



面影

大西龍二の遺稿

大西龍二は、戦前、戦中を通じて、我が国を代表する数少ない海外に活躍した知識人の一人である。その生涯は、戦時体制下の日本と海外との交流の歴史そのものである。彼は、戦前、戦中を通じて、我が国を代表する数少ない海外に活躍した知識人の一人である。その生涯は、戦時体制下の日本と海外との交流の歴史そのものである。

遺稿

大西龍二の遺稿は、戦時体制下の日本と海外との交流の歴史そのものである。彼は、戦前、戦中を通じて、我が国を代表する数少ない海外に活躍した知識人の一人である。その生涯は、戦時体制下の日本と海外との交流の歴史そのものである。

ストラスブルグ引揚げの記

大西猪之介

(上)

橋の上で不意にルウイズに會ふ 一九一四年八月一日午前十二時

「どうなるの？」

「私にも分らない」

「貴君は引揚げなければならぬぢやないの？」

「なぜ？」

「だつて 定住して居ない外國人は二十四時間内に獨乙を立去ねばならぬと 昨日の戒嚴令に あつたぢやない？」

「大學に籍のある外國人は定住者と看做すんですつとさ。あの規定はね」ほんの一時遊びに来て居るとか何とか云ふ人が目的なんで

「ぢやあ 國事探偵の爲めなのね」

「でせう。今しがた警察で聞いて來たんですがね」

「居れる間は居らつしやるの？」

「まあ そのつもりなんですがね」

「愈々危くなれば……………？」

「なるでせうか？」

「どうもなりそうよ……………」

「……………」

男は只女の美しい目を見詰めて居る。何日見ても張のある美しい目かなと思ふ。

「妾は そう思へてならない！」

「經濟的利害關係のさして込み入つて居ない東洋とか 中央亞米利加とか 或は歐羅巴にしても巴爾幹とかならばいざしらず 此歐羅巴の真中で そんな大きい戦争が たつ初まらうなぞとは 夢にも思はれない」

男は經濟學者と 見做された男である。帝國主義を研究した男である。戦はむ戦はむと號して化粧立をする事はあらむ 然もやがては妥協 仲裁 調和 互讓で終るが落着先と見極めたつもりの男である。故に男は飄然として 此ストラスブルグに 彷徨ふて居る。然して 自ら 自らの態度を名けて沈着と云ふ。——女にそれは分らない。

「そんな事を云つたつて もう 戦時状態の布告まであつたぢやないの？」

「モロツコ事件の時にも 巴爾幹問題の時にも 獨乙は動員したと云ふぢやありませんか？」

「あの時と今度とは違つてよ！…………それは御話にならない程違つてよ！…………一寸カツフェーに行つたつて分るぢやない？」

男の頭には七月三十日の一夜がありありと浮ぶ。

三人の獨乙人と「ピカデリー」と云ふカツフェーに會見した時の有様が生き活きと出て來る。さしもに廣いカツフェーに一つの空席だになかつた。奏せらるゝ音樂は何かの進行曲か 埃太利の國歌か 獨乙の國歌かであつた。「總ての上にある獨乙よ」と歌ふ時には坐にあらむ限りの人が席を起つて之を歌ふを見た。「ラインの守り」を歌はるゝ時には其日行つて見た ケールのライン橋が嚴重に兵士で護衛せられて 自分の旅券を出して見よとの請求さへ受けたのを想ひ出た。——恐しい想像が頭の中を横ぎつて

過ぐる。……動員……開戦……大砲……ツエツペリン……
 ……血……屍……火……荒野……人間の獸化……文明の荒廢……
 違つた考の流れが湧き上る……。其カフェーで 自分にまで一
 處に立てと云つた獨乙人 一緒に獨乙萬歳を叫べと迫つた獨乙人
 其獨乙人と自分とは カフェーを出て 十一時半から 他のカフ
 ェーで人生問題を論じたではないか。希臘思想と古典主義基督教
 と浪漫主義との關係を説きあつたではないか。進化と云ふ思想の
 如何に薄弱なるかを悟つて 永遠の輪廻の一語に 無限の 暗愁
 を覺えたではないか。「我れ生くと云ふは運命である 但し生け
 る我等が戦ふを要すると云ふは運命でない」と痛言した 其獨乙
 人の眼に清い人道の涙が走つたと見たではないか。「總ては何處
 に圈点を置くかに依つて定まる 刹那の我々は深い人生の意味に
 重味を置いて 戦争ありとは信じない」と云つて大學の前に分れ
 た時に 教會堂の 鐘は靜かに 三つを打つた。其大學の正門の
 上に「科學と祖國と」刻むである標語の前半のみに 其時は圈点
 を打つた。……十二時間を経ざる其三十一日の午後に 形勢は
 急に轉じて直下した。士官は數人の兵士を卒る太鼓を打つて其市
 中を廻つて戦時状態の布告を朗讀した。其日から政治上の集會は
 禁止された。通信 言論の自由はなくなつた。若干の新聞紙は發
 行を停止された。料理店カフェー等は十時以後閉鎖された。物々
 しい兵士の警備は全市に行れた。……危ない！
 「御母さんが歌へつて云ふから妾も「ラインの守り」と「總ての
 上にある獨乙國よ」を歌つたわ」然も三度……
 「もう一度歌つて見ない？」
 「いやな事よ！（我祖國心安かれ）なんか歌ふのは」
 「なせ？」

尋ぬる男を 女は 怪訝に見つむる。……佛蘭西の地圖では
 白く塗つて 獨乙の着色のしてない エルザスに生れて エルザ
 スに育つた女である。生れた時に其エルザスは最早や 獨乙の領
 地であつた。然し其女の血の中の成分は少しも變りはしなかつた
 少し興奮すれば「妾は獨乙の女ではありません エルザス女です」
 とよく言つた。それを知つてる男が 然か問ふは心憎き業なりと
 女は思ふ。答は外れる。

「昨日クレーパーブラックで或る外國人が佛蘭西萬歳と叫んだの
 そしたら それをつかまへて行つて直に銃殺したんですつて！」

「……………」

「……………」

うらわかい女と 色の黄な日本人との語る傍を 忙がしげに男が
 通る 女が通る 自動車を通る 電車を通る 而して兵士が通る
 橋のたもとに常ならば必ず見受くる 大公望を 此日は一人も
 見受けない。天下は正に多事と見ゆる。

「是れから何か用事があるの？」

「あ 十二時半までに歸れつて 御母さんが 云つとつたわ 今
 何時でせう」

頭の上に 二人を見下す 教會堂の時計は十二時三十一分を示す

「ぢやあ もう歸らねばいけないでせう」

「そうね 少し送つて入らつしやいな」

暑い夏の日が少し斜めに 容赦も無く下界を射落す並木道を女を
 右にして男は歩く。

「愈々始まれば どうなさる？」

「妾……あたし看護婦になるつもり……………」

「そして何國の……………」

後に人なしと見定めた女は低く然し力強く男の耳に囁やく

「佛蘭西の……………」

しばし たつて女は問ふ

「貴君 もう銀行から御金を出して来て……………」

「まだなんです」

「そんな 呑氣な 事をしてどうなさるの？ 直に是れから行つてらつしやいよ。妾なんか もうすつかり取つてきたわ

「そんなに 貴女は御金があるの……………」

「だつて少しだつて 損をするのはいやですもの……………」

「損をするつて どうなんです」

人を試むるを好む經濟學者と話す女は不幸なもの一人である。

「戦争が始まれば 銀行は店を閉ぢると云ふ事よ。それにね此市の貯金局なんか大騒ぎよ。あれは何日だつたかしら……………？ そう 埃太利と セルビア との外交關係の斷絶したのは二十六日だつたけね その二十六日は 日曜でせう。二十七日の朝妾すぐ貯金を取りに行つたのよ。そしたらね もう一杯の人なのよ。巡查が来て列を作らして 時々見計つて 三十人 五十人と入れてくれるんですがね そら 騒ぎなのよ そんなに苦勞をして いくら 取出せるかといふと 百馬克きりなのよ。

「何程預けてあつても……………」

「エ そうよ。然も 其れは 紙幣でしかくれないのよ。時間がかゝつて紙一枚もらつたわね」

「あさはどうするの？」

だから 妾は 日參したのよ 毎日行つて毎日一枚貰つてきたわ。それにね 驚くぢやない 帝國銀行でもう紙を金に引換へてはくれないのよ」

「何時から……………」

「そうね卅日迄は引換へてくれたんだけど昨日からはもう駄目よ」

「何にも引替へてくれない」

「そう 銀になら引替へてくれるんですとさ。それもね 皆でなくつてよ。百馬克の札を持つて行けば 三十馬克だけ銀貨を呉れるのよ。あさは 紙と紙とを引替へるだけ。

「だつて買物には差支ないんでせう！

「差支ない事はなくつてよ。郵便局で 二馬克切手を買つて二十馬克の札を出したら 銀を呉れなくつてよ。それに 私の姉さんは昨日買物をして 札を出したら 受取つてくれないで到頭買物せずじまひよ。誰かね 百馬克の札を出して金貨十馬克と 銀三馬克に引替へてもらつた人があるんですつて。それは何でも彼でも高くなるしね

「二十七日から生活品の價は皆一二割上つたと云ふ事ですわ

「そうよ。バターがね 一封度一馬克五十から一馬克八十になるでせう。玉子がね。一つ 八文から 十文以上になるでせう」

「少々高くなつても困りませんが 私の下宿では今朝は何時もの白い小麦のパンが手に入らぬつて 黒いパンをくれましたつけ

「そう あゝ そうそう 小麦粉が買へないし 出来てるパンは皆兵隊に送るからだわ まだ黒パンでも好いわね」

昔し此町がかこまれた時は犬や鼠迄かぢつてくつたと云ふんですもの。」

「そんな事になつちや耐ちない！

「なるかも知れないわね。……………あゝ もう 好いわ。御分れ。それにして直ぐ銀行へ行つてらつしやいよ

「銀行へは行きますがね。フライブルグへは何日行くんです？」

「フライブルグへ貴？君は呑氣ね當分は駄目よ それより貴君寫眞はどうして？今度のは少しは上手に出来ないの？」

「毎日飛び廻つて寫眞處の騒ぎではありませんやね」

「オヤ オヤ 都合の好い時だけ騒いでると云ふのね 一向騒いでも居ないくせに。それに昨日あたりから芝居も活動もしめてるんだから晩はひまなんですか。まあ好いわ 其中に仕上げてた置きなさいよ。此方では待つてるんだもの。」

「だつて 貴女はちつとも 賃銀を拂つてくれないぢやないの？」

「それは貴君が請求しないからよ」

「請求はしてありませんよ。フライブルグ か バーデンに行かうつて。」

「だつて 戦争騒ぎで危ないんだもの。今は此處から他處へ行けば もう一度此處へ歸つてこられるかどうかも分らなくつてよ。それでも好いの？」

「貴女と二人連れなら」

「嘘を仰つしやい。そんなに御世辭ばかり云ふから貴君は嫌いよ」

「そう嫌はれるならまあ 銀行くでも行つて金を取つて 何處かへ行きますかね」

「本當に行くつもり……」

「半分位……」

「そう……？行くなら行らつしやい……然し行く時は一度御分れにいらつしやらなけあ承知しませんよ！」

「御命令ならば……」

「命令ぢやないわ 御願いだわ」

「まあ 何でも ぢやあ姉様によろしく左様なら」

「左様なら」

洋杖を面倒そうに引摺りながら暑い日の盛りを銀行の方へ歩いて行く男の傍を 忙がしげに男が通る 女が通る 自動車が通る 電車が通る兵士が通る。—— 天下は正に多事と見ゆる。

(下)

「貴君はごうなさる御積り？」

聞くは或る中學教師の奥様である。問はれた男は女に分れて後の三四時間の市中の有様に少し心の動き出した男である。臆病を近代人の特徴と信じ 自ら臆病を標榜して恥ぢざる男である。虎穴に入るよりは虎兇を斷念せむとする男である。答は變つて来る。

「愈々始まるんですかね？」

「信じられませんけれどもね 此間 カイザーが北の方の旅から直に伯林に引返されたのが どうも只事ではなさそうです。」

「生まれは瑞西へでも逃げ込みませうか？」

「汽車が通じないといふぢやありませんか それに 此間から大層逃げ込むだ人があるから 今頃は満員でせう。五千馬克許り見せ金を持つて無ければ入れないといふ噂もある事だし 一八七〇年の戦争の時よりもつと物價が上る事だらうしするから まあ御よしになつたが好いでせう」

「ぢやあ白耳義へでも行きますか？」

「行けませうか？ストラスブルグから ずうつと ライン河を下つて白耳義へ行くのは てふど國境に並行して旅をする事でせう 汽車が通じますまい。それに 人傳てに聞いた話だけれど 白耳義は危ないつて……」

「ストラスブルグから下の方は平原がないし要塞があるから大部隊を動かし難いといふ事は私も聞きました。ルクセンブルグから白耳義へかけての 平原で大衝突があるとする と 成程白耳義は

危いでうね……それは、そうとして、今日は御嬢様は？」

此奥様は十二になる獨り娘がある。圓顔の何をいつても、にこにこ笑ふ可愛い娘である。其娘はいつも御母様と一緒にカフェーに坐つて居るが慣はしであつた。其姿を今日は見ない。

「あの、リーゼは、もう、ストラスブルグには居ないんです」

「どうして……？」

此處に居ると、危ない話許り聞きますしね、大層あの子の氣分を刺戟する様な事ばかりだから、昨日、田舎の方へ連れて行きました」

「田舎つて……？」

「河一つ越えて、あちらへね。真逆どうなつても、佛蘭西人がラインを越えて侵入するといふ様な事にはならないんでせうからね」

それにしても、ラインは、却に、越せないといふんぢやありませんか？」

「それは、面倒い事でした。第一、自動車といふ自動車は皆借り上げてしまつて、一臺も見當らないでせう。ようようの事で汚い馬車を一つ見附けましたが、それが、此處から、ケールの停車場迄常ならば一馬克半か二馬克なのを、七馬克呉れつて云ふんでせう。仕方がないから拂つて雇つたんですが、ラインの橋の處では非常に調べられました。」

「昨日の晩あすこで二人人が殺されたつて云ひましたつけ」

「どうして？」

「自動車で走り抜けやうとして止れと云はれても止まらなかつたからなんですつて。其一つの方は命令が聞けなかつたので、間違つて罪のない人が殺された譯なんです。もう一つの方には爆裂彈があつたそうです。それに三十日、晩から一定の信號に一定の返

事をしない飛行機は直ちこ打ち落す可しと云ふ命令が下つてるそうですからね」

バーデンの方では、此エルザスの方を殆んど敵地と看做して、此處から本當の獨乙領へ入るのを却々嚴重に取締つてる様です。私なんか、もう一度此處へ歸つて來れるかどうか疑はしかつた位なんです。」

「一体、ストラスブルグは策源地なんでせうからね」

今夜あたり、バイエルンの兵隊が此處へ皆やつて來るなんてな噂もありました。三十日の朝に私の家の前を豫備の召集された人が通りましたが、そう、全体で、三千人位にもなりましたか知ら、士官の人は皆家に居らなければ何處へ行つてるか出先きを知らして置けと云ふ命令を受けて居るそうですからね。到底も只事ぢやないでせう。もしかすると今日にも動員令が下るんぢやないかと思ふんですけど」

「昨日聞いた話では、露西亞の動員は六週間かゝるし、佛蘭西の方は今まだ準備が出来ないと云ふぢやないですか？」

だから獨乙の方からは早く片付けやうと云ふんでせう。それにしても困つた事ですね。私の息子も一人伯林に居るんですが、どうして居る事ですか、動員にでもなれば、分れにも來ずに、行くんでせうが……」

あらゆる時代を通じて母と戀人とは非戰論者である——少くとも自分の子供と自分の愛人との就ては、非戰論者である。君死に給ふ事勿れ、と歌はなくとも、然か祈るが人情の常である。(にも拘らず、親は子を産み、子は孫を産む。にも拘らず我が倚る可き男の胸には金時計燦として輝くを要し、我が右に歩む可き女は夏は絹の薄衣に、冬は臘虎の毛皮に飾られてあらねばならぬ——

人はふゆる 欲望は増す 而して 土地の面積は一定である。他を斃すにあらずんば 自己の欲望は充されぬ。他を斃さむとせば 自己の生命を投げ出しての賭博が必要である。——

古い問題である。而して新しい問題である。他くを知らぬ二十世紀の歐洲は此古くして新しき問題を 人口制限と欲望制限とで解かないで 鐵と血とで解かうとする。ナザレの人 イエス 此現世に現はれて 汝の隣人を愛せよと説いて以來 星霜積んで千九百年ネバの畔りスプレーの岸邊 聖なる鐘を突く人に何の博愛がある 聖なる鐘を聞く人の子に何の人道がある。世界の平和は夢であつた。人類の進歩は幻であつた げに二十世紀は闇である子を懷ふ母と人類の爲に悲む若人との 帳然として相對座する 沈黙は忙いでやつて來た其母の夫に依て破らる。

「聞いたか 巴里に革命が起つて ポアンカレーが殺されて ルーヴァーが焼けてるさ」

呆れた二人は 只目を見張る。

「本當だよ 今警察本部へ確に其電報が來たんだつて……」

それぢや もう佛蘭西はほつといて露西亞だけと戦争をすれば好いんですね まあ樂になる事!

佛蘭西が革命を起してしまへば 露西亞は一人で戦ふ元氣はないからね。是れで 先づ戦争は終ひだらう。

戦争がなければリーゼを連れて避暑に出掛けて好い譯ですね」

そうさな實に吉報だね」

二人の會話は佛蘭西と云ふ一語に限りなき憧憬をそゝらるゝ青年の耳には入らぬルーヴァーが渦卷く火焰の中に在る?あの端正とあの優美とに人しあらずば其前に跪きもしかねまじかりしミロのヴィナスが焼けて居る?—つ彼の畫ける女として其顔に一点の肉

感の面影をも止めざる あの ムリロの マリア昇天の圖が焼け落ちた?盗まれてあつたが爲に去歲は見得なかつたが せめて今年秋には再び訪ふて 舊主に歸れるを見やうと願つて居つた 其のジオコンダは永劫に見られない?サンチカリストの群よ 郷等は巴里の誇世界の誇 人類の誇たるあの不朽の 美術の殿堂を焼いて何を其跡に建てむとする?

ポアンカレーが殺された?押し寄せる頽廢 遊惰 沈滞儉安の 大潮を叶はむ限り隻手に支えて 今は夢と消え失せむとする 榮華の昔を復び引返さうと努むる偉人ポアンカレーが殺された?

セインの水面を吹きすぐる微風が陽春とは云へど尙ほ肌寒かつた三月の二十日に足らぬ滞留に今も忘れぬ懐かしい思出を胸の奥深く刻むでくれた其巴里 佛蘭西の總てを集めた其巴里が革命の手に荒されて國境にある軍兵は何とする?無殘無殘と獨乙の荒武者に蹂躙されて 羅典民族は亡ぶるか?

恐ろしい音信かな!

我に暫し黙想の時を與へよ と 若き心が叫ぶ。席を起つ。

「もう御出掛け?」

「ね 一寸用事を忘れて居ましたから」

「左様なら」

革命に拘らず 暗殺に拘らず 街の上に人の往來は常ならず盛んである。來る人も往く人も深い思慮と烈しい興奮とを示して居る日は曇つて居る。空氣は蒸し暑い。夕立 夕立 と心の中で呟く 但其夕立は革命でない 暗殺でない。羅典民族よ雄々しかれ。夕立夕立夕立と心の中で祈る。

其次の町の角で 田上君に會ふ。玉を突きに行かうと誘はれる。玉でも突けば氣が變るかと應して見る。帝國銀行の支店の前を通

る。劍をつけた銃を持つに兵士が三四人 門前に立つて居る。車に自動車に 銀貨の袋を積み込むで搬むで行く。—— 金はもう無いと見ゆる。

半町の先で 自動車に會ふ。一人の黒衣の加特力の僧侶を中にして 一人の士官と 銃を持つた 三人の兵士が乗つて居る。

ちらと過ぎ行く時に見た僧の顔は餘りに蒼白であつた。田上君が云ふ！「國事探偵！ 銃殺！ 今日朝から もう 三人殺された そうな！ まだ 三四人連累者があるぞ云」ふ玉を突く。何時も満員大入の玉場に我等二人の姿あるは一層の淋しさである。物思ふ種である。暗殺 革命 ルーヴアー が 頭の中を縦横に往來して玉が當らない。

「不思議に沈んで居るね」

「巴里に革命が起つたつてね」

「僕も聞いた 本當らしい」

「嗚呼 佛蘭西滅亡か 俺が玉を敗けて革命が止まるなら百遍でも 千遍でも敗けてやるが」

談の中に 不意と 堀田君が現はれる

堀「オイ 困つた」が最初の挨拶である

田「どうして？」

堀「どうも電報が通せぬらしい。どうしやう？—昨日 僕は伯林の友人へ電報で行つても好いかと獨乙語で聞合したらう。あの返事が今だに來ない。此方からの電報が向ふへ届かないか。向ふからの返電が此方へ届かないか。どつちかに相違ない。どつちにしてもよろしくない。」

田「汽車はあるか？」

堀「今停車場へ行つて見たが どうも分らぬ。勿論荷物は一切運

堀「女があるものだから呑氣に構へてるね。死なば一緒にツンテ ンシャンか」

搬しないから 立退くなら 荷物は 倉庫に預けるより外はない」
田「それは駄目 倉庫會社は今一個につき一ヶ月二馬克の保管料を要求して然かも其紛失 焼失等の責には任じない。よしそれでも預けるにしても 搬ぶ車がない。車と云ふ車は皆徴發だ。荷馬車 つだつてあれあしない。」

「ぢやあ 自分で引擔げるだけの荷物を小さい鞆に入れ持つて行くとして汽車はどうだ？」

堀「汽車は總て直通は怪しい。第一ライン河を横きつて直にアツペンアイワーへは出られない。フランクフルト迄何度も何度も乗替へて出るより仕方がない。

「フランクフルト迄出ればどうかなるか？」

堀「それは分らない。それに フランクフルトの近處に佛蘭西の飛行機が現はれたつて大騒ぎだそう。汽車も軍隊の輸送の間々に餘地があれば我等を搬んで 呉れるんだから 何時間かゝるか分つたものでない」

田「それより困つた事は金さ。僕は一週間許り前に 英吉利の正金銀行支店宛の手形が來たんで 此地の銀行へ持つて行つたんだね。通常五日六日で返事が來て拂つてくれるんだが今日行つたら一週間此方英吉利から一通の手紙も來ないさ。是れでも愈々オツ始まつて 立退かねばならぬぞ云へば どうせ フライブルグの領事から何とか通知もあらうし其時金も送つてきてくれやうせ 眞逆僕等を見殺しにする様な事もあるまいからね。其れ迄は仕方がない 尻を落附けるんだね。今日も先生に會つたら もし爵争になつて研究が出來ねば此度出征する人の跡釜として皮膚病の病

院の醫師になつて見ないか 月給は好いがと云はれた」

田「そんな呑氣な譯ぢやない」

堀「だつて 昨日の晩來とつたぢやないか。姿は隠しても帽子が机の上あつちや 仕方がない。

田「ぢやあ 白狀するがね。昨日は 相談に來たんさ。あの女は戦子の製造部に居るんだらう。處がね 帽子なんか云ふ奢侈品は戦争が始まれば賣れなくなるから あの女は職が無くなる ござして飯を食はうと云ふ心配なんさ

堀「看護婦にでもなるさ」

田「處が看護婦なんかは希望者がめちやに多いから 一寸看護婦にもなれんさ。勿論 只食ふだけだから 月に六七十馬克もあれば何とかして行くだらうと思ふんだが 此際此時六七十馬克が何ヶ月續くか知れぬとあつては大金だからね」

ボーイ が あわたゞしく上つて來る。曰く

「動員！！」

豫期する事は二日前からの事なれど 眞逆眞逆と思つて居つた動員は遂に來た。町に飛出して見る。日は暮るに近い七時である。室は依然として暗い。常に號外を見れば 歡呼した群衆 昨日の戦時状態の布告にも (フラ-) を叫んだ人民が此動員令に對しては只沈黙を守る。人は沈んで居る。町の上をぞろぞろと歩く。目的もなく歩く。カフェーを覗けば 多く空席である。坐るにも坐られぬ心持であるらしい。餘りの人通りに さすがに 清淨な道にも埃が立つ。蒸し蒸しとする。頭の上から大きい袋をあびせかけられた心持である。男も女も歩く。黙つて歩く。無意味に歩く他人を見ずに歩く。歩くは何故と考ふる邊だにあるまじう見ゆる。只あわたゞしい。只心許ない立留つて考へては我心の重

荷に堪ぬ。自ら死に走らねばならぬ人もあらう。我子 我夫 我父を死に送らねばならぬ人もあらう。死は必然でないとして 明日からの生計を何とする。妻に向つては六馬克 子供に向つては四馬克の扶助ありとして 一ヶ月十馬克 で親子二人がどうして其日が暮らせやう。そして其夫が死んだなら！ 其親が死んだなら！ 我自らが死んだなら！「死ぬるが忠義と云ふ事はいつの世からのならはしぞ」を不意と頭の中に思ひ浮べてる 日本人を振向きもせず 男が歩く。女が歩く。只歩く。只歩く。

夕飯を食ひに行く何となしに荒んだ空氣である。明日直ちに行かねばならぬ人がある。明後日行かねばならぬ人がある八月二日から八月六日迄の間に豫備にある人は皆召集に應じなければならぬ「日本が動員したと云ふは本當ですか」と聞く人が少くない。

露西亞は日本の怨敵で 日露戦争の時に償金も拂はなかつたんだから 此際後から 大にとつちめてやるのに絶好の機會だ日本人は此機會を逸する程馬鹿ではあるまいと云ふのが殆んど總ての人の意見である。

「自分は外交家ではありませんから分りません」と只答ふる。本意なさそうな顔をして引下るが例である。奥國がセルビアに宣戦を布告した時に 其臣民が「陸軍萬歳 皇帝萬歳」と叫ぶと共に獨乙皇帝萬歳と叫ぶと云ふ電報を讀んだ時に 自立自恃の力なき奥太利を何となうさげすんだ自分である。「伯林へ行つて志願兵になつて露西亞に向つて 進軍しては どうか」なぞと戯談にせよ云はれる時は 其利己的な心持に限りなき醜惡の感を抱く自分である。「獨乙に居るんだから獨乙を助け給へ」と云はれる時に獨乙人が何日 何等かの報酬を豫期する事なしに自分を助けたらうと反感を抱く自分である。

。「獨乙は日露戦争の時に露西亞を牽制したんだから 今度は日本が露西亞を牽制せねばいかぬ」と論せられる 時には 露國の作戰計畫に獨乙の參謀本部からの忠告が多かつたと云ふ噂を想ひ起す自分である。然からざれば 獨乙は何が爲に露西亞を牽制したりしや 單に日本の爲なりや はた己れの爲めなりやと反問したき自分である。—— 利己的な獨乙人に此心理は分らない。會ふ人 語る人 總て日本に 火事場泥棒をすゝむるにあかぬ。

「貴君も入らつしやるんですか」と或人に聞く。

「自分は國民軍ですから 行かないでも好いでせう。自分迄行かなければ大變です」と答がある。

宿に歸つて見ると 宿の婆さんが云ふ 先程巡査が來て貴君に此處を引揚げろと云つてきました。

「本當 朝警察本部で聞いたのは大部違ひますね」

「ぢやあ 一度聞いて入らつしやい」

早速飛び出した横の道は兵營の通り士官の乗つた自動車 糧食を積んだ荷車等が縦横に走つて 砂塵濛々である。司令部の前には召集に應ずる人や志願する人が折重つて居る。並木の下には若い兵士が下女と別れを惜んで居る。

突然遠くから國歌が聞える。然も軍樂隊附である數日前から軍樂隊は皆出發したと見えて一向聞かなかつたのを茲に聞く。今正に出發せむとする騎馬の一隊約五百人聲を合せて「祖國よ 心安がれ」を歌つて行く。其後に砂煙が立つ。砂煙の中に 抜きはなつた軍刀が青白い瓦斯の光を受けて 輝いて居る。—— 愈々始まつた巡査は答へる「居らうと御思ひなれば 御居りになつても好いんですが 私は一個人として どつかへ御出でなる事を御すゝめします。其方が御爲になりませう。

宜しいと許り引返す途に 再び先の人に會ふ。見れば眼に涙の跡がある。「どうなすつた」

「自分も行かねばならぬ。國民軍が召集された。滿十七才から滿四十五才迄の男は皆行かねばならぬ。私も今晚中に家を疊んで明日行きます。御機嫌よう。」

宿に歸れば宿の主婦は泣いて居る。自分の次女の婿と自分の息子とは海軍の爲に 長女の婿は陸軍の爲に何れも出征せなければならぬと云ふ。

「貴君は? 」 「今晚立ちます」

「どこへ? 」 「兎に角伯林へ」 「荷物は? 」

「手提一つ。跡は預かつてたいて下さい。焼ければ其れ迄です。」

夜の二時 ストラスブルグを後にして 北の方へと急ぐ。

停車場で買つた號外には 巴里のカフェーで 社會黨の領袖ジャウレスが拳銃で打ち殺されたと云ふ電報が載つてあつたが 革命と云ふ一字だにポアンカレ暗殺と云ふ一句だに見當らなかつた暗を突いて走る汽車の窓から 僅か三月の假の宿りながら 斯く振り捨てゝは流石に心殘らぬにしもあらぬ都の靜かに夜の幕に閉されて横はるを振り顧みた我眼の前には 巴里コンコルドの廣場に立つ ストラスブルグにかたごつた女神の像がありありと浮び出た。大佛蘭西の八大都市を現はした八個の像の中に交つて 只其像のみは 附けた喪章も哀れ深う朝な夕なを差し俯いて居つたではない。

か。然かも 一八七一年以來春秋茲に四十四 雨も降れ 風も吹け 其女像の前には だゞの一日たりとも花環の香絶れた事はなかつたののではないか。(終)

思出

拜啓 益々御健勝慶賀の至りに存じます。陳者故小樽高等商業學校教授大西猪之介氏は常に教授として學界に貢獻せられたること大なるのみならず 平素當小樽市を愛し 文化向上に盡瘁せられ 本會はその底護により今日あるを得たのであります。

茲に三年祭を迎ふるに當り追慕の情を新にせんが爲め 玉篋を得て記念の小冊子を編纂したく 就ては恐縮ながら長短を不問御寄稿を賜り度切望いたします。

追て勝手ながら編輯の都合有之二月廿日迄にメ切致度に付此儀御含置願度記念冊子は遅くも三月二十日迄にお手許に差上ります。

尙御起草には御便宜なれば左記質問の形式にお答へ下さる様御願致します。

小樽啓明會

出口豊泰

高田治作

- 一 大西教授に就て貴下の有せらるゝ追憶の一二
- 二 大西教授の學問上の功績として數ねらるべき点或は學界の損失と思惟せらるゝ点
- 三 今日ありとせば貴下は大西教授に如何なる希望をなさるゝか

大西先生と私

在東京

阿部芳治

つい身近かに いつもの頑丈な 氣取らぬ大西先生が現れて 上京眞つ先の日課ときまつてゐた觀劇に誘はれそうな豫感が 今も残つてゐる 大西先生を 追憶の人として書くやうな氣持になかゝなれない。不意の悲電を得た時の あの深い哀悼感に打たれた往年の衷心の蕩搖は 一夢であつたかに思はれる。だが心理を把握されることに鋭かつた先生は これを私の健忘性としてのみ非難はされないだらう 今 私にとつて先生の「生」の記憶ばかりが餘りに明かである。

先生との私の接觸は もとより學問的にはなかつた 學窓での師弟であつても私は決して頼もしい經濟學研究の使徒ではなかつた だから嚴密な意味で先生の學問的功績に嘴を容れる資格がない。先生との私の眞の接觸は 人間的にであつたと敢て言はう 先生の人格の 私に對する働きかけに生れてゐるのである(私の性格の一面に寄せられた先生の興味にも生れてゐる とは自分からは言ひ兼ねる) 先生に於て 最も信頼するに足る一人格 寸毫の懸引なく 寸毫の遠慮なく 赤裸の私といふものを打つゝけて自由に話し得る唯一人を發見した これは漸く二三の親友にのみ相容し得る心境である 私は 先生と眼のあたり または書信を通じて交渉の滋くなることに至上の幸福を感じてゐた。この幸福を卒然として奪はれた私が 一時極めて索漠たる空虚感に陥つた

ことは言ふに及ばない。

元來 先生の業績に對して推讃の基調に立つてのことだから先生から著書を贈與され または論文の發表ある毎に 却つてよく非難を先きにする送信ばかりしたやうである。「囚はれたる經濟學に」對しては 渾一に缺けて斷章に傑れたことに不服を述べたり「伊太利亞の旅」に對しては 實感の歪みと行文の不純を指摘したかと記憶する。「貨幣に現れたる人生の種々相」か「太陽」に載つて後 一般政治評論雜誌に執筆されるやうになつてからは大抵一人の讀者として何かしら不遜な評言を呈したやうに記憶する。「ルーヂンよりバザロフへ」は發表前にその冗漫を不適とする苦言を呈したのであつたが(雜誌の讀物として)添削を経て「解放」に載つた。そしてこれが學界以外の人士に好意ある批評を以て酬いられた最初のものであつた。「丸鬚の心理」に對しては 女性通の一顧にも値すまいと私は酷言した記憶があるこれには親昵された他の方面からも同様な批評があつたやうで 先生は悄げられながら「評論集には意地で採録する」と言つて居られた。

これ等は 何れも私自身に執した言はでもの枝葉の追憶かもしれなかつた。本當に聲高く言ひたいとは先生の喬木に生うし立つべき稟質なりしが故にこそ他日の大成に滿幅の期待をもつてゐた事である。學問研究に對する先生の精進には永遠の信頼を拂ひ得たるが故にこそ 私は十分の心服を以て先生の靴の紐を結ばうと思つてゐたのである。先生はまだ服のうちの午前の學者だつた。日盛りはこれからだつた。日暮に近い午後の 道遠くして同じノートを繰返す學者に對してなら たゞ過去に敬意を拂へば足りる先生の學者的氣魄を以てして これに享年と同じき後半生を假すとせよ私は世界的な業績の何物かを發見し得るに至らなかつたか

き。これが何物にも換へ難き遺憾なのである。惜みても尙餘りある理由なのである。

先生が後年自信を以て講義された「經濟學原論」は「君が出版業者として自立する場合には無印税で原稿を進上する」と言はれたことがある。然し私はまだ通讀さして頂く機會を得なかつた。私達が學窓に聽講したのは 先生の前期の原論であつた。私は先生の長逝後「大西猪之介全集」をも夢想した。然し生憎出版業も資本主義經濟の埒外のものではない。何か特殊の出版方法がないものかとこれが今も胸中を來往すを一恟怍である。

何物かを書き續けながら 何物をも言ひ得てゐなかつた氣がする先生への追憶記は急がず纏めておきたいとは思ふそれは先生よりの來翰全部を整理した後のことである。幾年かに亘る私の手記から先生に關する記述を摘出した上のことである。そして先生の全著作を再び味讀さして頂いてからのことである——生は俗務の多忙に今更の嘆聲を發せざるを得ない。

思ひ出づる事ども

相澤正美

(一)

今ペンを執つて亡き恩師大西教授を偲ぶに當り先づ思出さるるは先生の堂々たる風采である。學者と云へば兎角顔面蒼白な神經質であるか。或は短軀瘦身を連想させられた私等はあの色の淺黒い 澄んだ瞳と廣い額を持れたそして五尺六寸近い体格となかなられる迄十六貫といふ 普通人に珍らしい体重さを有された先生を見て 實に心強さを感じたのであつた。

先生この身体を攝生される点に於て頗る慎重なものがあつたそうだ 何でも學生時代野球をやつて胸を痛められたことが聞いてゐるが 常々あらゆる方面に身体の注意を怠られなかつたとはS教授から傳へ聞いた事である。

(二)

先生の姿が小樽の隅々何處にも印せられぬ所はないだらう と思はれる程先生が散歩好きであつたのも その意味に於てうなづかれる——尤も先生は別匠の意味に於て我々の様に漫然と散歩するのではなく 必ずや思索のため 考をまよめられる爲めに散歩されたものであるかも知れぬが——。

よく私等は手宮の町はづれや埋立の濱邊等に先生を見かけ驚いた事がある。しかもそれが毎日殆んど欠かされた事なく 亡くなられる時も依然として數日前迄續けられたそうで そこに先生の意志の強固を見る事ができる。私等は何かの用事でよく私宅を御訪ねしたものだ。その時ステッキの有る無しですぐ先生の眞在宅を見分ける事ができた。三時頃から四時頃迄は大抵不在であつた様に思ふ。

經濟學者であり 同時に哲學者であつた先生は 敢て小樽のカントを以て任じられたのでもあるまいが 先生がケーニヒスベルヒの哲人に私淑された——と仄かに測斷して——如く私共は今尙先生の面影を髣髴し永劫に忘れ得ぬであらう。

(三)

私は辯論部の委員として 部長たる先生の指導を受くる事が大なりしたため 自然先生に接觸する機会が外の人よりも多かつた。部長として先生は實によく部の面倒を見て下さつた。

一言を以て言へば用意周到 計畫遠大であつた。北大聯合辯論會 巡回講演 名士の講演等皆先生の發願に基くものである。而して必ず依つて來る利害を考慮し 絶対に弊害を残さざる様用意された。北大聯合會の如き終るやすぐに明年度の選手 講師を豫定されるといふ様に 先へ先へこの計畫を進められた。巡回講演の場所を五ヶ所と限定されたのも先生の深い考から出たので 或年に妄りに多數の場所を講演しては翌年度に困る様になるだらうとの御考であつた。

そして尙私等の顔を見る毎に「何々の件はどうなつてゐる」と反問せられ若し放任しておいた様な場合にはひどく叱責されたものだ。何時であつたか雪の降る寒い日は非今日行つて來いと言はれて 内心少からず先生を恨んだ事もあるが 時日切迫迄打棄てかいた 自分の責任であつたので後で先生の氣象を知るに及んで 自分の不行届を

恥ぢた事がある。

(四)

先生が演壇に立たれたのは在學時代數回でその中フート教師の送別會の時獨乙語で次は北大との聯合演說會に「經濟價值と倫理價值」なる演題の下に 更に國際聯盟成立の時「鬭争の心理」と題して雄辯を揮はれたのは今も尙記憶に新なものがある。

しかも常に和服で通された先生がこの後の二回に共に洋服を着されたので一層印象が深い。先生の演説は宏辯博辭滔々として盡くる事なく 齒切りのよい 透徹した聲で一時間でも二時間でも述べられる。實に聴く者をして恍惚たらしめずんば止まぬ概があつた。晩年先生は殆んど演壇に立たれず練習會の時に必ずされた批評も中止された。いつか辯論會の時N君が引用したメーテルリンクの死後は如何に就て先生の批判を試みられたのが最終であつた。そしてそれが死生問題であつたのは 偶然であるとはいへ 後に至り我々は何等かの暗示を感ぜざるを得なかつた。

晩年の先生は氣のせいとか何となく引込思案の様に思はれた あれ程周密な先生が辯論大會に當り伊藤痴遊氏を招がんとしてその招待費が部がないので 之れを先生に語つた所 生徒から何程かづゝ徴しては如何と云はれた時私は却て今後の悪結果を來す事を虞れ 他から支出の途を請じていただいた程である。この事は今に至る迄先生として進んでかく言はれたのを私は不思議の一つとしてゐる

(五)

先生は極めて責任觀念の強い方であつた。これがため無理をされ 遂に大切な身を失はれる事になつたのだと思へば更に残念である。先生が最後の講義は私等の經濟史で丁度封建制度から資本主義國民經濟へ移る道程を話されたのである。そして何かの序に現代の政治の腐敗してゐる事をその時痛罵された事をも私ははつきり覚えてゐる

あの時後で聞けば先生は發熱三十九度以上であつたそうさ そして講義の終へるのを待ち兼ねて——いつもより二三分早く切上げられた様だつた——宿直室でこてもたまらんと言はれ乍ら休まれた——。噫それきり我等は遂に先生と再び地上に接するの日はなかつたのである。

或時競技會の事で生徒の委員と——私もその一人として——先生方の委員——大西教授は勿論その一人——とが折衝した事がある。先生は極力運動會の不要を説かれ勉強すべき必要を力説された。そして反對論者には大西がかく言つた事傳へよと斷言された。私は少からず先生の責任觀に動かされた一人である。自分が云つた事明言せよ

さは普通の人にして云ひ得ざる事である。先生は事實生徒の間に受けは悪かつたに違ない。しかも誰一人先生に楯つき得なれたのは——先生と我々の距離が余りにかけへただなつて窺ふ由もなく全く底知れぬ海そのものであつたのは言ふ迄もない——實に先生が自ら明言断定せられて決して責任回避をさるゝ如き卑怯の態度微塵もなかつた点に存すると思ふ。

(六)

先生はよく人生觀と云ふ事を口にされた。講義の最終には結局人生觀の相違といふのがよく出て來た。先生の人生觀はごうであつたらう？ 私等は常に之れを知りたかつた。然し自ら先生が自分の人生觀らしき事を我々に説かれた事はない。たゞ我々の推測に依るに 第一先生の行動が之れを立證する 義務觀念の強烈すぎる程の強烈と 第二は前に述べた潔く責任を自己に負ふ事と 更に我々の演説を評された時の死生の超脱——死後は如何といふ事を問題にするのは死に度くない一種の證據で 死そのものは苦痛でないが 死の瞬間に伴ふ苦痛が苦しいといふ人の説は一應聞こえるが 一体それは切り離し得るかごうか さ言はれた様に記憶する——それ等が先生の人生觀ではなかつたであらうか。

葬儀の済んだ後天上寺の住職に聞いたのであるが先生の御臨終に當り御尊母が何か遺言はないかと問はれた時「無」さ一言答へられたのみであつたといふ。死生を超脱した人に非ずしてこの言はなし難い。偉大なる哉その人生觀。

(七)

噫思へば先生逝いて正に三年 空暗雲低く垂れこめて 風落葉松に叫び 雪天狗山に舞ふ夕 巨星天の彼方へ飛んでから三年の月日は過ぎた。然し乍ら年月の経過と共にその記憶は新に そして先生の偉大なりし事が泌々と感じられる。消えなごする蠟燭のまたいきなごたよりに 我等五名が他の教授と共に恩師の遺骨を拾つた光景はいつ迄もいつ迄も消え去らぬであらう。——實際私は身よりの者の骨一つ拾つた事のない身である。

(八)

先生の學界に於ける功績 將來は言ふべき其人他に在るであらう。私等の口にすべき限りではない。我等はたゞあの透徹した哲理に 豊醇なる文學趣味を取り入れ 先生獨特の純理より脱化した經濟原論が如何に展用され行つたらうか といふ事に限りなき興味を覺ゆるのであるがそれも今は空しく仇となれるを恨むの外はない。

私にはしなくも「小樽は大西教授に依つて名を成し 大西教授は小樽に依つて名を成した」と言はれたT教授の言を想起し再び机上に飾れる先生の小照を見て 澄める瞳廣き額 智そのものに輝ける先生の英姿に接し得ざるを悲しむ。然り そは我等にまつて限りなき悲みである。さり乍ら先生は小樽の人として逝かれたるを思へば——しかもその年既に中央に出でらるべき準備 ほぼ整ひつゝありしと聞くに及んで尙更——我等が恩師として葬り得 永遠に綠丘學壇の明星たるを私するを得る事は我等のひそかなる誇りでもある。

茲に先生の冥福を祈り拙き一篇の筆を擱く。 ..(一九二五・二・二三) ..

法學博士

福田徳三

拜 答

一に對し。極めてスマートな人であつたこと 萬事に氣の付く人 其代り他人のアラが見へ過ぎて自分でも困つたらうと思はるゝこと 親切で癖い處へ遺憾なく手の届くこと 或時には親切過ぎる位であつたこと 人の長を見れば一も二もなく服すると共に 其れが思つた程でないさ氣が付くと 氣になつて氣になつて堪らず 自分の思ひ通りにせずは己まなかつたこと 人を喜ばせることに長じて居たが 恐らく自分は一生慰められざる人で終つたらうと思はれること。(下略)

二に對し。批評に長じ 他人の説を十分に諒解し 親切に之を照介したこと。ジャーナリスチックで學問の幅を廣くするに貢獻したことは可なり大に存じます。唯余り幅が廣過ぎて奥行の方は之れに伴はなかつたことは残念ですが ソレハ短日月の事故不得止事と存じて居ます。永生せられたら奥へも深く行かれたらうと思ひます。

三に對し。獨創な理論研究か 其れが出来ずば一層思切つて大膽な時事評論 文明批評をして貰ひ度いこと。恐らく後者の方が可能性に富んで居ることゝ存じます。理論研究は小樽には手塚教授ある故 同氏に一任しても可なりと存じます。後者には中々人を見出せません。此点で大に惜しことと存じて居ます。

(一四・二・十二)

大西先生への追慕

出口豊泰

大正十一年二月九日 寒氣が俄かに緩んで往來の人々の踏み荒した通りは 足駄の齒に耕され鋤き碎かれた 雪の上の歩き憎さ 電車線路に沿ふて雪解けの水が汚なく流れてある——その日夕方私は大西先生の訃報を傳聞しました。それを傳へてくれた人は新聞記者でしたが 私が余り呆然とその人を見詰めてゐるので「本當だよ」を二三度繰返しました。譬へやうもない暗い氣持 凡そ世の中に張合といふものが失はれてしまつた氣持。私はうなだれ勝ちに家へ歸りました。後で阿部芳治君の書信の中に 今迄は先生一人を目當てにして讀書もし批評もしたのに これからは何の張合ひもないといふ意味が記されてあつたが それは悉く私にも同感出来ることでした。私は幼ない時分から軍談戦記の類を好みました 漢楚軍法 吳越軍記 太平記 平家物語などを類りに讀み耽りました。それが生きた歴史であると深く信じてゐたので 歴史程面白いものはないと考へてゐたのに 程なく それは考ひ違ひで本當の歴史といふものは面白くもなく心躍らすものでもないことを悟りました。それと同時に所謂歴史がまだ知らない本當の歴史があるのでなからうかき疑つておりました。例へば講談本の取扱ふ範圍の歴史 もつと高い見地から言へばバルザックの「人間喜劇」の中の世界——そこには當時の社會の種々相があり當時の市民の生活があり その心の中まですつかり示されてある——の如きが本當の歴史だと思はれてならないのでした。或日(大正三四年頃)當時小樽税關に居た杉村大造氏とそんな話をしてゐた際「大西猪

之介といふ人がそつといふ歴史を(茲では文明史の意味)やがて書く 今外國へ留學してゐる」と聞されました。そこで初めて大西先生の名を聞いたのでしたが 相見ゆる機會はずつと後に残されました。初めて御目にかゝつたのは確か大正八年の暮 小樽高商の會議室 擬い物らしい絨の上へ 黒五ツ紋の着付 セルの袴を無造作につけて 羽織の袖にチョークの粉がついてゐる その袖を組み合せて 一種のリズムを味つてゐるやうな足取りで つかまゝ入つて來られたその人 恰んご真中から髪を分けてゐられるので額高く且つ廣く 目は牡牛に似て而も瞳に鋭い光を帯び 眉毛の上にある一つ黒子も 意味あり氣な先生の風貌に接して 二三用談を交へたのみでお別れしました。對話に少しも無駄がないので僅か二三分で事が足りました。私は要領のいい人ださ感じて歸つたのです。

何時の間にか先生の書齋を訪れる光榮が與はられました。緑町四丁目の互信社の借家でした。小高い處から見下す此劃一的な加ふるに實用一遍な建物は 恰かも小屋さといふ感じを與はるのでしたが二扱てそのうちの一户の殊に好ましく 慕はしく私を誘ひ寄せたのは先生の寓居です。門燈はついてゐるが但し一度も点じられず支關前に井戸があるので 暗い夜なぞはうつかりするとそれに突き當りそうでしたが 先生は却て一般が門燈を点じてゐるのに 此處は点じないから訪ふ人が迷はない位に思はれて「いらぬからつけなないのだ」と言つておりました。母上と二人きりの靜かな生活相當朝寢をされて午前中は讀書 原稿の整理に費され午後學校へ出るさつといふ日課は亡くなるまで殆んど變りませんでした。今も目に残るは私達をもてなされんとして うそ寒い日になると 首を突込む程近く 髪の上に灰をかぶるのも構はずに 火鉢の火をたこされる 親切な姿です。耳に残るは會話の途切れた氣拙い瞬間を償はれんとして「なかま」とか「ごうも」とか 繋がり強いて求められるやうな言葉です。暖かい心の人でなくては あれほど努めて人に接しないものです。私は先生の人格の暖かさをそれが先生の本質だと思つてゐます。先生は四十になつたら學者商賣をやめると屢々語られました。その理由の一は出來上つた講義を蒸し返しするのは潔くないといふこと。その第二は學問は決して徳を高くしないといふことでした。そして學界に於ける暗闘の劇しさ思はしさをしみいゝ迷懷されることがありました。勿論之等の座談的な言葉尻をとつて其人を見究めるのは不用意なことですが 私は併し敢てその不用意を犯さうと思ひます。それは先生が充分道徳的であり得たことを知つてゐるからです。先生は底光りのする情熱を抱いてゐました。若しも世が一層清く美しかつた

ならば 純眞にその情熱を現前したに違ひありません しかも鋭い生先の頭は世間の暗い影を見逃すことが出来ませんでした 經濟學者の先生は殊更にその暗影を見詰めなければならなかつたのです 生先の處世的手腕は全く抜け目のないものでした それは現實を悟ることの鋭敏から来る 云はば反應も稱すべきもので それを先生の本質と思ふのは誤りでせう 先生が斷片の中に「眞の人生は商業主義の終る處に始まる」と書いた氣持は 體驗に根ざした淋しい嘆息とも聞えます。

凡そ人氣を背負つて舞臺に上つた限り 人氣を持ち續けて舞臺をしらなければならぬといふことは 獨り俳優の約束ばかりでなく又浮世の約束でもあります 此一点から眺めると今日世に押出された學者程痛ましいものはない それは突然決勝点に向つて驅ける競走者であります しかもその決勝点は豫定されては居ないので 人氣は必ずしも學者の押立てた眞理を その儘決勝点とは許さないかも知れませぬ 従つてその競走は何處まで續くか分らないとすれば學者は本來の惱みの上に違つた色の惱みを重ねればなりませぬ 先生はある日私に言ひました「どうしてある眞理は人氣がありある眞理は人氣がないのだらう」「アインシュタインは聞けば聞くほど分らないがそれでも皆が知らぬのを恥と考へてゐる 何故だらう」眞に意外に死は突如として此人氣の始末をどうしたらいいか考へてゐる人氣者の先生を 此係累から解放しました思へば嘗て宗教を志したといふ先生が「生の宗教と死の宗教」を完成せんとしてゐられたのも何かの前兆でせう。

先生は屢々自ら人に告げるほこの人生觀を持合せないと云はれました 併し「伊太利の旅」を読んだ人は 先生の人生觀が如何なるものかを推測し得ると思ふ 即ち個人としてはニイチエに 社會としては歐洲の文化に キリスト教と文藝復興に説き示されてゐる根本思想 約言すれば相反するものゝ相尅と調和が 世を高く美しくするといふあの思想です 學問的には眞理の一方性といふことを唱えられました 従つて立場の純粹が先決條件と考へられ 經濟學に他の科學例へば倫理學の混入する如き不純を厭はれました「經濟價值と倫理價值」然らば經濟學上の種々なる流派の何れを以て自己の立場とされたか 先生自ら何れの流派にも屬しないと言はれ 強めて言へば經濟學の分つた經濟學派までもいふべきだと言はれました「勤儉の意味」要するに廣く色々の立場を見渡してそこに相對的な解決を求めるところに於て シュムメル思想の精

隨を擱んでゐるのであり 兼ねて又「伊太利の旅」の根本思想をも照應してゐるのであります。

茲で思ひ起すのは 我等に最も親しき演壇上の先生です「だがそう考えることは人間にとつて決して嬉しくない」「それは眞理であるが但し人氣がない」など、演壇の上で心持首をかしげて 斜めに群衆を見渡しながらかつと頸をひくあの姿 興乗れば一段聲も高まつて 金屬的な音を響かすその聲が 私の目の前にちらつきます 先生は文章の上でも模倣し難い味を持つてゐられたが 辯舌の上でも技巧に苦心される人でした そしてその技巧の洗練を除いても 確かに聽衆をひき付け得る内味が光つてゐました 時としては避け難きデレンマに聽衆の心を操り乍ら そこに科學の限界横はることを示して その儘ふつり口を緘つてしまふ場合もありました。勢ひ聽衆は與えられた問題を懷にして 歸らねばならぬやうな破目になります 私は戯れて之を戯曲的講演と名付けました。或時は又ある一の立場から導れるに理論を 流れに棹さず如く追ふて來て 突然違つた立場の見方に移り その鮮やかな對照を取扱ひ乍らしつくりした調和を與へることもありました 前者に對してこれは充分小説的でした。

先生の立場から見れば世に種々なる眞理の行はるゝは學が生のため存するを示すものであり 如何なる眞理が果して正しきやは生の廣く深き要求に基いてのみ決せられる 經濟學に就て言へば偉なる政策を生み 歴史を通じて永遠性を確證した眞理が正しいのである 以上は素より私の單なる憶測であるが先生が特に經濟史を重んぜられた点から見て 又「囚はれたる經濟學」の一章「生の爲めの學」を反讀して 大なる誤りはないと信じて居ます。

先生の墓は青山墓地にあります 昨年私は葉櫻の上に重い晩春の雨が 降り頻る中を詣でました 井上侯爵家の墓地の後ろになつてゐますが 崖に近くその下の窪地一帯の見晴しは美しいものでした。

三週年忌を紀念すべく先生と同僚の方々特に武田 高島兩教授の御骨折で論文集が一冊近く生れる筈です それには既に發表された論文と 講演を通して發表せられた「社會學の概論」「婦人問題概論」「勤儉の意味」「生の宗教と死の宗教」それから滞歐中の論文「英國の勞働問題」外數篇など 公刊されるなら我等は必ず此若くて逝

ける大西先生を追慕する悲しみを新たにするに違ひないと思ひます。

エル フランク

大西氏が丁度歐洲の旅から歸られた時に あの教養の深い 美しい印象に満ちた 驚ろくべく該博な 生々ど快活だつた氏に私は 識を得た。氏が單にその専門の學を修められた許りではなく 歐洲文化の複雑な全幅をも自己のものとしやうと努められた事がすぐ感得された而してそれは氏の大きい努力によつて見事な効果を 擧げられたのであつた氏が語學に於ける智識は輝しいほどのもので 英 獨二國語の他に 佛 伊語をもよくされたのであるが その中の佛 伊語は氏が歐洲に於て始めて修得されたものであつた加之 氏は西歐の文藝について 稀れに見る完全な理解を持つてゐられた。例へば 今日 學校圖書館に藏されてゐる氏の書籍の卷末には しばしばそれに關した梗概或は適確なる批評の誌るされてゐるのを見る。その上に 氏は特に造形美術の愛好者であり 音樂を愛賞し 而して すべての學に通曉しやと努められた。ゴエテの Zum Schen geboren, Zum Schauen bestellt, schau ich umher in der schönen welt と云ふ言葉は 當時の氏の快活な 社交的な 本質に實によく適合してゐた。尤もそれから後には 氏が自ら變ずる事の出来なかつた外部の事情のために 少しく苦しまれ 遠慮深くなられた。一度氏が正しいとした處のものに踏み込むために 自らを估料する事も亦氏の公明さであつた。

氏は極めて眞面目に教職をこられた 氏は又 學生達に出来る限り人格上の影響を與へようといふ眞剣に努められた。それ故に 氏は學生達の「好きな先生」であつた と私は信じる。加之氏の活氣ある 而して人を静觀に導く風な教へ方をされた。歸朝後既に

久しく経てからも氏の博學の興味は少しも減じなかつた。その頃に氏は最早 泉の源を持たなかつた。そこで氏は總ての印象をより深くし 氏がかち得た處のものを精煉する事を試みられた。飽くる處のなく見わたる氏の受容性の階梯から 多くの要素の總てが自我の正合に結びつけられたであらう豊穰多産の階梯へ氏は確かに到達したであつたらうに。その時に當つて 突然な死が氏を我々總てから分つた。然し 二三の氏の門下があらわれて 氏の才氣にあふれた 快活な講義から 何時か精神的遺産を嗣ぐであらうと云ふ希望がかけられてゐる。

ボンにて

早川三代治

玄関を入つて右の客間。大西さんに托されて來た二葉の寫眞を手渡すると 老主人は左右の手にそれを展げて繁々どそれに見入つてゐた。やがて

「大西教授もこれで幸福だらう」と老主人は満足氣に言葉をもらした。老主人は ボン大學のドイツエル教授である。老教授の眼は 新婚當時の大西さん ババになつた大西さんの姿を繁々ど見くらべてゐた。

○

宿の女中が勢込んで三階にある私の部屋の戸を叩いた。下にドイツエル教授が訪ねて來られてゐる と傳へた客間には 宿の主

婦が老教授を迎ひ入れて 無沙汰のわびを相互に言ひ交はしてゐる處だつた。

「マルクス批評を大西教授へ送つてやるのだから日本字でアドレスを書いてほしい。」

老教授は黒い帽子を手にしたまゝで 私に薄い印刷物の包みを渡された。部屋へ戻つてアドレスを書いて玄関へ降りて來るとそれを郵便局へすぐ持つてゆくのだと云つて さつさと元氣のよい足取りで去られた。あれは「マルクス價值論の價值及分配論の根本的誤謬」だつた。

○

ゴルテを偲ぶワイマールの旅からボンへ戻ると 留守の間の机の上に 大西さんからの久しぶりの手紙を見つけた。一月廿三日附。手紙には 私の送つたリッケルト ジンメルの本が届いた事日本の學界の淋しいことが書かれてあつた。

「依然福田對河上の時代にして 之れに匹敵すべきものは現はれ來らず 又現はれ來る必要もなきなるべし。一橋にては三浦氏左右田氏嶄然一頭地をぬく。小生はもう一度東京へでも留學したい位なり」とあつた。

「十二月より約一ヶ月間東京伊豆の方面へ旅行せし處 其地に在る間は身体甚だ順調なりしが 歸りて十日ほどは全く妙に氣力ぬけて 何も手につかず。不思議な事でした。氣候のせいとせう。どうしても小樽は暗すぎますね。」ともあつた。

「文壇にては 例によつて倉田百三氏中心人物なりと云ふ。何んでも一度書くと素敵な原稿料をもらう由 近頃小説家萬々才なり福田さんでも二圓の本が千圓になつた事ありといふ。恐らくうそにあらざる可しと思ひます。」ともあつた。

「札幌麗澤會は十二月以來大いに再興の由 小樽の啓明會は二月に自然科学で記念講演をやるこの事です。まあ かういふ運動も氣永くやつておれば何かになるんでせう。ボンあたりでは僕の居た時分にはよく 夕 土曜の講演會があつて僕なんかよく顔見に行つたんだが 此頃でもそうですか。獨乙學界も先輩連凋落 一向淋しいものだが 目ざましい偉才が出て來ませんか。ディツェル先生も近頃はよほど人につきがよくなつたやうですね。年のせいですかね。」ともあつた。

○

やがて 出口豊泰兄からの便りに

「大西さんは腸チブスで長橋の避病院へやられました。此手紙があなたの手に入る頃にはもう療つてしまふといふやうな調子にしたいものです」とあつた 私は戰慄した。生命の危険 幸ひに療つたとしても 頭がこわされて細密な思索に困る様になりはしまいか 戰慄をつゞけた。病中 或は病後に長い手紙をた目に入れる事を心配して 一度認めた手紙の投函をやめて 新に二枚の繪葉書にお見舞を最も簡単に認め直した。それが濟んで淋しく夜の休息を求めた。

○

明けた朝。女中に呼び起された。日本から手紙が澤山。その中に一枚の黒枠の葉書 それが大西さんの訃報。私は驚ろいて その他に誰れか詳しい便りを大西さんに就いて送つてくれはしまいか。それを突作に感じた。出口豊泰兄からの手紙が二通。

○

二月九日 大西さんの急を聞いて認めた出口兄の手紙には「不取敢 この事をあなたに御知らせします。悲しんで下さい。

嘆いて下さい。惜しんで下さい。」とあつた。

「北海道も もう寂しい」ともあつた。

十二日に葬儀が済んで十三日に認められたらしい手紙には。
「貞子さんが何かしら不安氣にむづかつたのと 大西令妹の白い被衣から見ゆる面ざしが餘りに大西さんに似てゐるのが新たな哀愁をそゝりました！」とあつた。その他に 病氣の経過が詳しく認められてあつた。

「八日午後二時から十時まで四回にわたる腸内出血が致命的にしました。」とあつた。そして 遺稿の事なども認められてゐた。

○

床から起き上る元氣もなく ちつと黒框の葉書を見つめてゐたもう十時半。やつと心なく 起きた。夜前の星空はもう灰色で雲ですつかり包まれて 冷い風が吹いてゐた。天氣が私の心を一層沈み勝ちにした。あの朝 もしも 天氣が前日の様に晴れ晴れと春の光りに満ちてもゐたら 氣分はかへつて混濁してしまつたであらう。鈍い曇日に心地は少しく静められて 外套の襟を立て乍ら三階の部屋から街へと下りて行つた。玄関を出ると はしなくも 其處を 新しい寢棺が何處かの不幸の家へ運ばれて行くのを見た。私の足はドイツ教授の家へ向つた。

○

客間で待つ間もなく 階上の書齋から降りて来る老教授の足音が元氣よく鳴つた。御挨拶の後ですぐ私は尋ねた。

「大西教授から何か便りは御座いませんでしたか」

「いや 別にない。わしも十一月に「マルクス價值論の價值」を送つてやつたが その後は無沙汰をしてゐるんでね。と云ふ返事だつた。

黒枠の葉書を私は老教授の前に 無言でさし出した。

「誰れのだ」

「大西教授が死なれました。」

「病氣は何んだつた」

「チブスでした」

「チブス？ チブスがまだ日本に在るのか？！」

老教授は非常に驚かれた。椅子から飛び上つて驚ろかれた。私はかくしから訃報の手紙を取り出して展げてゐる間 老教授は黒框の葉書を手にとつて ちつと見つめてゐた。葉書をさかさまにして。日本文字をさかさまにして。老教授は一字も親しみのない筈の葉書を 倒まにして凝つと見つめてゐた。もし私がだまつてゐたら 誰れかの死を意味してゐる事は黒枠によつて察しられはしても それが誰れの死を告げるかは解らなかつたらう。

「大西教授が死んだか！」

○

發病から最後までの経過を談る間 老教授は黙々として聞いてゐられた。話が一段落に來た時に

「學問のために惜しい事をした。わしのマルクス價值論々難に何かきつと云つて寄こすだらうと待つてゐたのに。まだ若かつたなそれに若い夫人に 幼い小供に」と言葉を切れ切れに云つて黙つてしまわれた。

約半年ほど前に 丁度此の日の様に 對座して「大西教授もこれで幸福だらう」と喜ばしげな批評を寫眞に浴せかけられた事を思ひ浮べた。

「家内もこれを聞いて どんなに驚ろく事か！どうか 遺族の方々によろしく傳へて上げてくれ わしと家内とから深くおくやみ

申上げると云つてやつてくれ。日本字が書けるといへんだがな！

弔電にヂーツェル教授の名を入れる事を許して貰つて 老教授の傳言を御預りして辭去した。

○

大西教授が「春はうれしく秋は淋しい」と書かれたボンを去つて一冬を羅馬で過した私の旅鞆には「伊太利亞の旅」が在つた。春雨の一日 それをサロンでひもどいてみると 居合はせた或る一人が

「此の間 ナポリでクローチエを訪ねたら 大西の話が出てね 頭のいゝ男だと云つてたよ。二度目に訪ねて來た時には もう立派にイタリア語を話したつて。」

私はサロンの窓から 春雨に煙つてゐる向ひ側の骸骨寺を眺め乍ら 大西さんの新しい墓の上に 春雨が静かに暖かくふり濺いでくれる事を願つた。

(一九二五・紀元節)

故 大西教授の學生時代

小樽高等商業學校教授

平尾丹治

世に大志を懷いて必成を期する青年甚だ多い 而も大志ある者多くは放漫に流れて恒業を勤めず 恒業を勤むる者も亦多くは汲々焉として大志なし 所謂細心にして果斷 著實にして機敏なるものは甚だ稀れなり 世に有爲の士が一世を輻軻不遇に終るもの蓋し此の兩者を兼ね得ざるが爲ではなからうか。

古來稀れなる此の性格を 逝ける大西君に於て之を視る 君や身を京都商業學校生徒より起し 神戸高商に入り 一橋專攻部に投じ 終りに小樽高商の教官として 行く所として皆其業を勉め 其事を擧げざるなし 而かも君が經綸の志は未だ曾て瞬間も失はざりしことは 學生時代の君を知る余の深く信ずる所である。

屈指 二十有余年 君が摩耶麓の學園に在るや 勉勵衆を越へ才學群を抜き 嶄然として夙に頭角を顯せり 就中力を經濟學の研究に委ね 他は殆んど措いて之を省すと雖も尙能く同級の首席を贏ち得たりき 學校の例として卒業に際し論文を徴して其學力を試験す 君が提出したるもの之れを帝國主義論と云ふ 通じて五百余頁 歐米各國の帝國主義思想の勃興を説いて國策の樹立に及ぶ 其引證の正確と 該博なる智識とは 蓋し稀れに見るの論文なり 指導教授津村君 深く君の寄才を愛し 刊刻せしめて江湖に推奨したるもの 即ち君の帝國主義論である。

明治三十九年の秋 一日 一青年學生が余の茅屋を叩くあり 見れば 軀偉大 筋力強健 敢爲の氣象勃々として眉宇の間に溢る 言を俟たず 客は大西君其人である 就て來意を問へば 君莞爾として徐ろに説いて曰く 今や經濟上の帝國主義 歐米に於て論戰酣なり 國歩益艱難の時に際し 憂國の士は宜しく彼を知り 以て我れを知らざる可らず 經世の先驅者たる豈男子の快事にあらずやと 談論風發 言々悉く肺肝より出づ 話題は進んで 當時英國政界の大立物なる老「チエムバレン」氏の大英帝國主義の論評に入る 時に君が意氣は將に天に冲するの概あり 是に於て余益君の言を多とし 其人を偉なりとし 半日の會話 深く君の爲に感動す 感奮興起 斯ゝる聳動を與へたるもの獨り余而已ならむや。

君が細心にして著實 思慮極めて周密なりし性格は先天の素性に
あらずして寧ろ後天の工夫に成りしものと思ふ君幼少の頃氣を
以て勝ち 其郷に在るの時 動もすれば同輩を凌ぎ自己の信ずる
所は長者にも譲らず 猪突 單調の性格とは 君の私淑したる先
輩の訓言である 後 摩耶の學園に入り 君驪然として悟る所あ
り 慨然 己を責むるに大志ある者須らく細心ならざる可らず
と爾來 晝は出で講義を聴き 夜は則ち文庫に入りて 廣く和
洋の書を漁る 而して學園の校風は君の性格を保育するに偉大の
感化を與へしなり 校長水嶋君は身自から其範を示すの人 常に
學生をく導くに溫容以て之れを遇せらるゝも苟も眞摯の氣風 眞
面目の躰度を欠くに於ては寸毫も假借する所なし 一校の校風擧
らざらむとするも得べけんや。

不幸にして余の神戸にあること僅に貳年 前世の君を知るも後
世の君を知らず 是は益經濟學の研究に志し余は商業學の方面に
向ふ 而かも星霜二十有餘年 再び君と相遇はずして茲に君が英
靈を地下に慰藉するの時に逢ふ 君が英姿は髣髴として常に余の
眼底に浮ぶ 悲哉嗚呼 何を以てくを長へに送らむ乎 願ふに小
樽港頭 綠丘岡上に高く聳ゆる我が校舎は永久に君が英靈の宿す
所 之れを保育し發達せしむるこそ 君に對する余等の責務なら
ずとせんや 特に君が學界に於ける偉大の効績に報ゆるの道も亦
君の遺志を繼ぎ 幾多の大著名文が 綠丘の校舎より續出世に紹
介さる時こそ。眞に君の英靈を慰め 君に報ゆるの道なりと確信
するのである。」

不思議な思出

橋本博介

「世界の耳目を掠めて二旬余杳として其の消息を斷つたバルチック艦隊が突如佛領カ
ムラン灣頭に勇姿を浮べたのは明治三十八年四月十四日であつた 泊すること十幾日
波靜かな夕佛蘭西政府の形式的抗議に錨を抜く露西亞艦隊の青年士官に 情熱に燃ゆ
る若き婦人を絡せて袂別を惜むドラマチックな情緒をもした優艶な一篇がカムラン
灣の夕べを題して學友會報に載つた それが色の眞黒氣な 目ばかり光らして居る大
西猪之介の筆に成ると聞いたとき一同啞然とした……………」

× × ×

「……………聲量はたつぷり 内容亦整つて居るので喋らせても實に巧い 大坂毎日が主
催した關西學生競辯大會に見事一等の榮冠を贏得たのも彼なれば 河上肇氏が千山万
水樓主人の名で讀賣紙上に掲げた社會主義評論そのまゝの筆致を移して 西陣織の歴
史を書いたものも大西君である。學生の頃は遺憾なく天才肌を現して誰とでも議論を
吹ツかけ 従つて喧嘩はする恐らくあの男の目からは 人がみんな馬鹿に見えたのだ
らう——そんな工合だから學校を了へる頃クラスから絶交された 大患で寢て居る上
野君がそれを知つて我事のやうに口惜しがり全快後一同に挨拶して和解させた筈であ
る。上野君はいつも陰に廻つて 大西を取りなして居た 帝國主義論は絶交期間の産
物である。」

「大正十年の夏頃 やはり同期の友で久原商事の東京支店長をして居る岡信吉 日露
興業の専務三浦良治 會計課長の米津喜九郎の諸君が 大西を東京へ出して勉強させ
やう 或る筋から年額六七千近くの金を出させ得る自信もあるし 又僕たちも出来る
だけの事をしやう そして住む家も建て、やう 衣食の保障を興へて 大西の頭を
専心學問に……………向けさせやうそして博士に……………この様な計畫を具体化さうとした
とき東京海上に居る同窓の先輩鈴木祥榮君や總務部長の堀内泰吉君が僕等呼んで

「大西を東京へ出さうと奔走して居るさうだが やつと今名が賣れ出して方々からチ

ヤホヤされて居るときだ そのとき東京へ出すのは恰も墮落に導くに等しいものだからもう二三年小樽で辛棒させ 東京へ出て學校も相當な地位に就ける様にしてからでない駄目だ 博士になるには學校と云ふことも從的に關係するのだから……………その時が來たら僕も亦 君方に劣らず運動もせう力も注がう 今暫く見合す事を大西の爲めに勸告する……………」その事を大西君に話したら「君等の好意は非常に感謝して居るが 僕は今まで随分迷惑をかけてるんだから此上諸君の御世話になるのは たいへん苦しい 水梨の親爺が儲けた金でも出して呉れるんなら兎も角だが……………御好意だけは受けやう然し期待に背かぬ様折角勉強して居るよ」と辭退したので時機を待つ事になった 所が間もなく僕の家へ遊びに來た大西が「今土地を探してる 家を建てたいと思つてれ大工の好いのを世話して呉れんか」「君に家が要るのかい？」要るかいつて母の爲めに建てるんだ 僅か五百や六百の金で母を満足させれば此上もない親孝行だから」と言つて居た それで「いつたい大西君は小樽に尻を据えるつもりか ナア 今からそんな料見を起されては困るぜ 二年も一年も待てはしない早速何んさかしなけれや」上野君との間にそんな相談も出來た。

「不思議に見てならない事が二つ三つあるんですがね去年の一月でしたよ……………湘南地方の旅行から歸つた大西君が僕の所へ土産物を持って來た 曾つてなかつた事であるし且つその中に家内へ椿油が一瓶あつた。」

「年はとりたいものだ君にも椿油が氣のつくやうになつたから」

「ばか云へ俺にだつて金さへあればナンでも買つて來るさ」

そんな冗談を云つたりした 僕が上京する四五日前突然大西がやつ來た。

「ナンだいさつきあんなに電話で話したじやないか」

「話したことは話したが今度奥さんも一緒だらう 機会を外すとお目にかゝれない様な氣がするから」

妙な事を云ふそれぢや逢つたら宜いが折角來たのなら一緒に飯でも食はう 北海屋へ出かける途中何心なく保險の話が出て

「それ程位ぢや足りないからもう一万圓もつけて置け 金は僕が出してやつてもいいから」

と云つたが人のからだに保險をつけて金を貰ふのはあまり面白くもないと大西君は笑ひに紛らした その夜は三橋君も入つて三人晩くまで話し込んだ 大西はそのとき既に發熱して居つた由である。

上京後僕も間もなく流感に冒され夫妻諸共逗子の別荘に静養して居つた 水梨さんの見舞の手紙には大西も今病床に在るが稍快方に赴いてる旨附加へてあつた。快方の二字に一切の安心をもたせて居た所……………ふしぎぢやありませんか。

寢て居る部屋には佛壇があつた 附添の看護婦に頭を揉で貰つてれむらうとしたとき 音もなく佛壇の扉が開く 誰れか來たのかときいてみたら否えと云ふ閉めさして眠りに就かうとすると再び扉が開く 一夜の中にそんな妙な事がたしかに四回あくる 朝十時頃大西昨夜死んだと云ふ電報で色を失ひました。……………」

〔大正十二年二月五日小樽新聞追悼號談話轉載〕

ブムメライ

丸谷喜市

社會政策學會の大會が本郷の大學で開かれた時であつた。二日に亘る討議 講演懇親會と言ふような行事がすんだあとで本郷から萬世橋までブムメつたことがある。大西君の外に商大の高垣君 慶應の三邊君が一所であつた。其時は大西君と三邊君とが大に談じた三邊君は例の警句澤山で甚だ痛快な議論をやる。

大西君は例の何も彼も呑み込んだような口調で 軽く而も鋭く談じて居た何でも大分先輩や同人の棚卸しがあつたように記憶する

その翌日同窓の午餐會で又大西君に會つた。大西君は何時の間にか自分も小樽では頭株になつた などと言つて笑つて居た。笑つたあとから「君 卒業生を探つて呉れんか」などと周圍の誰彼に交渉するので尙ほ可笑しかつた。

大西君とはそれで別れた それは大正十年の暮のことであるのだが大西君はそれから小樽へ行かずに伊豆にまはつたそして伊

豆である病を得たことをあとで知つた。

翌年の同じ社會政策學會でまた三邊教授に會つたら教授は「あの時は餘り悪口を言つたものだから大西君が死んだ。今度は僕の番かも知れない」と言て笑つて居られた。それはユモラスな言葉であるが同時に淋しい言葉だ。

大西君が若し生きて居られたら同君の學問はどうあつたと思ふと言ふような問題を示されたがそれには次のように答へたい。大西君の奇才には誰も敬服して居たが同時に滿腔の敬意を拂ひかねた人も多々あつたようである。併し同君の欠点に就ては總明な同君は他の何人よりも明かに知つて居たこと思ふ。そして其れに處すべき道も同君自身よく知つて居たであらうしまた命があつたら必ずそれを實行して居たに相違ない。

大西先生と余

松村光三

大西君とは一つ橋專攻部時代に二箇年へだたつて居つたので机を並ぶことは出来なかつたが共に等しく關一博士の指導を受けた門下生として互に消息を通じて居つたので其後相識る機会も多く殊に歐洲留學中其時を同じうしたので伯林滯在中は集つて隨分議論を闘はしたものだ。更に歐洲大戰が起つて倫敦に避難してからは屢々珈琲店等で同學の士が會合し論戰に花を咲かせた。

爾來歸朝後同君の上京は僅に年一回位に過ぎなかつたが

其都度會合しては例に由つて談論し又拙宅にも二回許り來訪された。

所で同君の遺著としては神戸高商時代の「帝國主義論」一つ橋專攻部卒業論文「社會主義に關する研究」(公刊されず)及び「囚はれたる經濟學」「伊太利亞の旅」等であると思ふが同君の研究が漸次眞摯なる學究的態度を採られあの様に霸氣あり元氣あり殊に麗筆ある同君が場當りの原稿書きも敢てしなかつた事もよく學者としての同君を物語るものである。

同君に尙暫く春秋を藉したならば必ずや經濟原論方面に於て何等かより有力なる研究を發表された事と思ふのみならず同君自身も斯る方面の研究につき前途の抱負と確信のあつたことと想像するがそれも死兒の齡を數ふるに過ぎぬやうになつたのは誠に遺憾に堪へぬ。

同君は又た専門研究以外に藝術的、文學的方面にも仲々多分の趣味を持たれ歐洲留學中も音樂や演劇に留意して居られ此点では全く門外漢たる余は同君と太刀打が出来なかつた。當時倫敦滯在中偶々柴田環女史のオペラ及聲學につき大議論(?)を闘はし余は藝術と人格との協働を高唱し同君は其差別を主張した事等も尙昨日の夢の如き思ひがする。

兎に角同君の如き奇才あり霸氣ある學究者を失つたことは確に我經濟學界の爲めに一大損失たるは言を俟たない。余は同學の知友として今更ながら同君追慕の念に堪へざるものあり茲に聊か所感を述べた次第である。

松田 新

故先生に初めて御目に掛つた時の印象はこんな風でした。當時は學校の方は未だ私等の級許りであつて グリーンの校舎の色も鮮やかに總てが新らしい氣分に充されてゐました。其の爽やかな九月の或る日 經濟學專任の先生の紹介があるといふので 私等は教室に待つて居りますと今は古屋の方に居られる國松先生と御一緒に入つて來られて 御紹介の言葉に次いで あの通りな無造作につかつかご教壇に上られて 唯

「大西猪之介」

とのみ言はれて 軽く頭を下げられたきりで出て行かれた。白い紐の 黒い紋付に短かい袴 如何にも飾氣のない純な學者的な態度 然も人を射る様な鋭い眼なごしは私等にも直覺的に汲めども盡きない頭腦の所有者たるを思ひ私等の等しく昂奮を感せず居られませんでした。それから經濟原論の講義が始まりましたのは間もない事でした。其の第一時間の冒頭にかうありました。

「舊歴史學派の泰斗 William Roscher が其著經濟原論に於て 經濟學の出發点は人なり 又其の到達点も人なり……」と

恐らく先生の御生涯中 教壇に立たれて講義としての最初の御言葉であつたと思ひます。すつと後に私が世の中に出てから先生に御會した時

「先生のあの時の講義の眞の意味が 今になつて解つた様な氣がしますよ」と言つたら先生は苦笑して居られました。眞實に先生の様な熱の籠つた講義を未だ曾て聽いた事はありません。「諸君の」内から一人でも Captain of Industry たる人の多く出づれば此の講

義の目的は達せり」と勵まして下されたが 私の様に平凡な生活を望み偉らく爲らふ等とは 一寸も思はない人間を先生はどうお思ひでせう。恐らく地下で又苦笑されて居られる事とせう。

眞理の一方性に就て

—「囚はれたる經濟學」に對する一小疑問—

南亮三郎

名著「囚はれたる經濟學」一卷が學問上占むる地位は 云ふまでもなく 一面自然科學としての經濟學の立脚地を闡明し 而も他面歴史的文化的科學としての方法論上の要求を拒否せざらむとするにあつた。先生自身の言葉を以て云へば「自然科學派經濟學かメンガーカリツカートか」と云ふに非ずして「自然科學派經濟と文化科學派經濟學 メンガーとリツカート」と云ふに在つた。而して方法論上は全然其の性質を異にすと思はるゝ此の二つの要求を 相背馳せざるものとして 一つの統一に止揚すべく役立つたものは「眞理の一方性」と云ふことであつた。こゝに名著が有する學問上の獨自性がある。「囚はれたる經濟學」に對する一小疑問—恐らくそれは 余自身の單純なる無理解に由來するであらうところの さうして之を茲に述ぶることは恐らく余自身の散漫なる頭腦を表明するの他 何物にも役立たないであらうところの一は即ち此の點に係はるのである。

思へば眞理の一方性と云ふ考へ方は 既に 先生か歸朝後幾何もなく當時二年生であつた吾々に爲された貨幣論の講義に現はれてゐた。貨幣論の第一頁は貨幣論の定義を以て始まつたのである

に掲げられた四つ五つの定義は皆正しいんだと云はれた時に 學問は知つても學問論には全然無理解であつた吾々は如何に驚愕の目を見張つたことであらう。實は其處に 後の名著を一貫せる根本思想 真理の一方性の片影が現はれてゐたのである。學生は皆ペンを描いて 先生のあの理智に輝いた瞳 聰明に秀でた額 情熱に燃えた唇を見まもつた。さうして其處に吾々の認識論的懷疑の第一歩が始まつたのである。「囚はれたる經濟學」の大半を捧げて先生が指摘された一事は 正統學派並に歴史學派が方法論的と云つて 立場の相違にも拘らず共に等しく「普遍」Das Allgemeine を究めたこと云ふことである。従つて先生に残された究極の問題は 斯く從來の學者が一様に究め來たつた普遍化の要求と 新しく擡頭しつゝある文化科學派の「個別」das Individuelle への追求とが 經濟學の分野に於て認識的に如何に交渉するかと云ふこと 換言すれば普遍化と個別化とは同じ經濟現象に對して可能なりやと云ふことであつた。「真理の一方性」は此の問題に對して先生を特異な結論に導いて行つたものである。

右の問題に對する先生の回答は 恰もリッケルトが 普遍化及び個別化の二概念構成が全じ「現實」die Wirklichkeit から可能であると考へた如く 全じ經濟現象に對しても個別化と普遍化とは全時に可能であると云ふに在る。「先生自身の言葉を以て云へば 「リツカートの認むるが如く一切の現實が普遍化的に觀察せられ得るものとすれば 經濟現象を自然科學的に研究しようとする計畫其自身は一應 認識論上否認せらる可き謂れがないからである。」こゝに生先の經濟學認識論上の出發點と到達點とがある蓋し 若し斯くの如き經濟現象の普遍化が 個別化と同様に認識論上可能だとすれば 文化科學派經濟學と同様に自然科學派經濟

學の建立 必ずしも不可能ならざるべきが故である。

而して先生に依れば凡ての真理は一方的である。「自然科學が一方的なるに等しく 史學も亦一方的なるものである。自然科學が現實より遠ざかれると相等しく 史學も亦現實より遠ざかれるものである。一は普遍的概念を主とし他は個別的概念を主とするも 概念の概念たる點に於て最早や現實そのものではない。」其處に先生の所謂「生と學との距離」が横はつてゐるのである。

さて余は之に對して二つの方面から先生の思索の跡を吟味し得ると思ふ。一は經濟現象の普遍化と云ふことが假令斯く認識論上否認され得ないとしても それは果して經濟學の本質と相背馳せざるものであるかと云ふことであり 而して他は真理の一方性と云ふことが經濟學認識論に果してどの様な意義 重要を有つかと云ふことである。前の問題に對しても余は不幸にして先生と若干所見を異にせざるを得ないが 特に 茲に一考を費して見たいと思ふのは後の問題に關する。但し此の二つの問題は先生の場合では決して別々のものではなく 實は前の問題に對する先生の肯定的回答は 自から後の問題に對する先生の獨自的な理解から出發するものなるが故に 此の後者に對する吟味は總て名著全篇を通じての吟味となるのである。

先生は屢々 真理の一方性を説明せんがために 貨幣の定義と伊藤公の例とを以て來らるゝ。全じ一つの貨幣であつても その素材たる金屬を注視することに依りて金屬學説は生じ その法制的要素を重視することに依つて國家學説は生ずる。等しく是れ人間の死であつても見地を異にすることに依て或は歴史科學の知識となり 又自然科學の知識ともなる。而もその何れの定義 何れの知識と云へども 夫々異なる見地から眺められたものであつて

何れを是とし何れを非とするの何等の絶對的規準もあり得ない。斯くて先生によれば「在るは總て相對の眞理にして 絶對の眞理でないことゝなる。もし強ても絶對の眞理を求むるならば 世に絶對的な眞理はないと云ふ絶對的眞理だけある事となる」のである。

それが自化科學的概念であらうと 文化科學的概念であらうと 概念たる點に於ては最早や現實そのものではないと云ふこと 從て又 斯くして成立せる凡ゆる知識が現實の一面的理解であると云ふこと を考ふる點に於ては 余は全然先生の御説に服するの喜びを有つ。但し「問題を百八十度に旋回して」却々斯くの如き相對的眞理論が經濟學認識論にどの様な重要さを有つかと云ふことに關しては 余不敏 聊か異論なき能はざるを憾むものである。先生は一方的眞理の成立を可能ならしむる夫々の見地を 各々特異なる「認識要求」と名け 碎いて「趣味」と呼ばるゝ。而して認識要求と云ひ 趣味と云ふも そは人に依りて夫々異なるが故に 此の立場を一貫すれば學問は趣味に應じて 幾らでも出來上ることとなる。貨幣論上の金屬學説も名目學説も 經濟的信認説も主觀的評價説も 或は又經濟學一般に於ける心理的傾向も技術的傾向も 夫々一面の眞理を捉へたるものにして 其の何れの一をも非として斥け得ないと全時に 是れ以外の見地 是れ以外の傾向の可能性をも否定し得ざるものである。此の様な見方は果してどの様な重要さを 經濟學認識論に對して有つであらうか。

頃日 余は或る必要に迫られて「資本主義」の概念を検した。さうして其處に驚くべき見地の混同 概念の混亂を發見したのであつた。ゾムバルトによれば資本主義は二つの要因を以て成立する。一は社會的要因であり 他は心理的要因である。社會階級の

對立 即ち人口の 生産手段を所有する階級と 生産手段の所有から絶縁された無産労働者の階級とへの分裂は 資本主義の社會的要因であり 而して自給自足の觀念とは根本的に相反する所の利潤獲得の經濟的精神は 資本主義の心理的要因である。但しゾムバルトが資本主義的精神として特に力説高調せんとするものは此の後の要因なること云ふまでもない。經濟學体系に於て純粹心理的立場を一貫せんとしたリーフマンにも 夫々 心理的 社會的とも名くべき要因が認められ得る。「餘剰の追求」Das Ertragsstreben 即ち「消費經濟」は「消費者餘剰」を營利經濟は「營利餘剰」を追求すと云ふことは營利的流通經濟を可能ならしむる心理的要因であり而して此の餘剰追求の結果として生ずるところの自由競争は其の社會的要因であり且つ近世の營利經濟をして中世の經濟より分たしむるの標準となるものである。經濟學方法論に於ては リーフマンと正反對の立場に立つデイールに依れば 資本主義には全しく二つの要因がある。技術的要因は其一であり 社會的法制的要因は其二である。十八世紀の後半より十九世紀の前半に亘つて産業上に行はれた技術の革命は 資本主義の第一の要因であり此の革命に基きて 而も之が完全なる發展を遂げしめた經濟生活上の凡ゆる制限拘束の撤廢は 資本主義の第二の要因である。

以上掲げた三つの「資本主義」概念は 夫々特異の「認識要求」に基いて構成されたものである。而してそれは資本主義の一面的理解だと云ふことが出来る。但し吾々は此の故を以て 是等の概念は何れも經濟學上正當なりと主張することが出来るであらうか 眞理の一方性と云ふことから 現實の普遍化的理解も 個別化的理解をも認めむとせられた先生の立場に於ては 其の何れ概念も皆一様に眞理だと云ふことゝなつて 其の何れを非とし 何れ

を是とするの何等の指導原理もあり得ない。吾々は果して此の様な見方に於て 經濟學上の「認識要求」を充たし得るであらうか。各人の「認識要求」は恐らく多様であり 萬人の「趣味」は恐らく無限であらう。されど經濟學上正當なる 而して之なくしては學としての經濟學を建立し得ざる「認識要求」——認識目的は唯だ一つではないであらうか。「真理の一方性」と云ふことが 經濟學認識論上何等かの意味あらしむるためには 抑も此の「一方的」を分つアブリオリは何であるかこの問題は生せぬであらうか。斯くして凡ての見地を許容する先生の立場は結局左右田先生の所謂嚮導觀念 選擇原理を無視したる 經濟學認識論上の無政府主義に歸着するものではないであらうか。——

左右田先生嘗つて「囚はれたる經濟學」を評して 何等の結論にも達すること能はざりきと述べられた。其の何故であつたかと云ふ言外の意味に至つては 評者と被評者との二人を除いて 恐らく多くの人々は充分に其の意味を悟り得なかつたであらう。余も亦不幸にして其の一人であつた。右に縷述した一小疑問は恐らく右に向つては自然科學派經濟學の手を把り 左を顧みては文化科學派經濟學に媚を呈せんとした「囚はれたる經濟學」著者の勇敢な然し不徹底な態度の一因たるには 餘りに無力であらう。——先生おまし給は、恐らく大聲叱咤 余の不勉強を詰らるゝであらう未熟な此の小疑問を 茲に述べようと思ふは 一度びは先生を仰ぎ 先生を離れ 而して再び先生に歸らんとしつゝ、ある一人の末輩の心からなる感謝と 限りなき追憶の念とを新たにせんがために外ならぬ。——

(十四年二月七日 追悼茶話會座談の一節)

故 大西教授の街頭氣分

三田村俊雄

(一)

學者的な蒼白な血色はして居られたが あの頑健な骨組體格の所有者であつた 大西教授が苟且の病より病勢一變……………無常迅速……………忽然として他界せられてより既に三星霜 顧みて感慨無量である。

生者必滅と云ふが 死には其の「時」が必要であると云ふ 過去の偉人に就ても死の場合の條件が可成り其偉大さの程度に及ぶがある様であるから一面よりすれば人生の死が必然であるならば客觀的には其時機と云ふ事が極めて大切なことになる 換言すれば死は絶對悲哀の事柄ではあるが而も觀方によつては「幸福な死」と云ふものがある。

教授の早折は教授の將來に多大の期待があつた支け それだけ深酷な「ショック」を與えたが 教授の死には前述の様な幸福の死等と云ふ分子は毫頭見出すことの出来ない悲哀の極致であつた。即ち教授が思のままに學的 人的活躍を遂げられ もう少し月並に云ふならば 適當な長壽を全うせられた上に幸福な死が恵まれて欲しかった 嗚呼!

(二)

教授は兎も角も未成品として早折せられた……………尤も私に教授を未成品と批判するだけの資格がないかも知れぬ 然し之れは私の相對的追憶である……………然しよし教授が尙飽く無き長壽を重ねられたとしても恐らく自身完成品としては 世を終はられなかつたと思ふ 教授は極めて派生的な 低回趣味的な經濟組織で云ふならば迂迴的生產の特質を有して居られた それだけ大きな自己完成を求めて居られた様であるから假令將來に於て學術上の稱號を得られたから 或は社界的に絶大な賞讃を博したからと云つて それで 本當の満足を得られたか否かは疑問と思ふ。

學究としての教授 學問上に於ける教授の權威造詣等に就ては教授の著作遺稿其他の發表乃至既に發表せられたる諸先輩の追憶記事等によつて余りに明な事實であるか

ら敢て私の喋々を要せない事と思ふと同時に私は兎もすれば教授の追憶が従来餘りに學的方面にのみ走り過ぎて居る様に思はれるから 私は主として社界人としての教授 もし學究を理論と假定し得るならば教授の政策的方面を 學問を書齋と呼び得るならば教授の街頭的特質に就て追憶して見たいと思ふ。

(三)

教授は書齋的超人であつたと同時に亦之に劣らない街頭の超人の素質を持つて居られた。だから若し教授が政治家として打て出でられたならば一國の志士となり 實業家として出發せられたならば實業界の一角に嶄然たる一大勢力を型成せられたと思ふ。特に教授に親しく接して居つた私共には其感が一層深い 教授は見掛けによらぬ情緒の所有者であつた…… 教授は酔ふては敢て美人の膝をも辭されなかつたと思ふ…… 私は殊更教授を社會的塵埃の内に俗化し去らうと企てるものではない 世の多くの人々は往々學者藝術家等を遇するに其人物の政策的方面を取入れる事を嫌つて 例ば机上の時計と鶏卵を間違へた事により 或は金錢的物質的欲求に恬淡であることによつて一層其人物を價值付ける様に考へて居る様である 勿論之は通常觀念としては良い觀方であるかも知れないが 之を以て絶對的尺度とはなし得ないと思ふ 人間の信仰は多くの場合一つの神を對照として居るが然し同時に二つの神を信仰の對照となし得ないと思ふ規則はない だから教授の如き超人的天才が同時に二つ以上の方面に傑出し得るは亦當然のこゝと思ふ。

教授の遺著「伊太利の旅」によつても教授が單なる學究でなかつたこゝが明である 教授が小樽啓明會の様な市井の文化研究の團體の爲めに渺からぬ力を致されたそうであるが夫れ自体が既に教授の學究以外多分の街頭の氣分を漂はして居ると思ふ。

小樽高商が先年昇格の眞拳運動を開始して鐵火の如き氣勢を擧げた而て不幸それが不成功に終つて居るが該運動は同格高商の全國的簇生による一般教授の素質問題より自校の消極的内容低下を虞れた純正なる自己批判より發足したるものであるが其の運動核心に教授の存在せられた事は事實であり私をして卒直に云はしむるならば教授は該運動勃發の導火線であつたと思ふ。言や甚だ賤劣であるが教授は此の運動の成功によつて教授自身の外面的資格其他の物質利欲の獲得を目的とせられなかつた事は今更加筆の要なく當時教授に對しては既に各方面から名稱的にも實質的にも可成有利な條件付 勸誘があつたのであるから直に之に應諾せられたならば何も北海の野にそんな餘計な苦勞 心配は無つた筈で此等の点に就ては我等同校出身者の特に感

謝すべきであるが 在學時代教授の巧に學生心理を把取せられたる講義振りとに思ひ合せ教授の民衆的?政策的特質の一端を窺知し得ること、思う。

(四)

教授の後年は漸次書齋より街頭化せられて居り 夫れは教授の專攻が社會科學であつた爲めでもあるが一面こうした街頭的特質を多分に有せられた結果であると思ふ。此の故に若し教授の將來の豫想か許されるならば確に此の傾向の顯著な表現が社會的實際運動の方面に 更に進んでは或は其の第一線人物として雄躍せられたであらうかと思ふ私にはどうしても教授の生存が可能であつたならば 必ずこうした進路を採られた様な氣がしてならない。

兎も角社會問題の愈出て益々錯綜せんとしつゝある時流に際し教授を永く遂に其の登場人物たらしめ得ざりしは獨り學界の痛恨事のみならず社會民衆の利益に取つて一大損失であつたと思ふ。……以上或は私の「ドグマ」であるかも知れぬ而て其の範疇に齎したる地下の教授は難有迷惑を感じて苦笑を洩されて居るかも知れぬ。

謹而故大西教授の冥福を祈る

(一四・二・一六夜)

○ 村瀬 玄

青天の霹靂と云ふ語は私が大西教授の逝去を知つた時の感じを形容するに最も適當な成句だと思ひます前置が大分長くなりますが私は大正十年の十二月十五日に小樽を引き上げて留學の途についたのです丁度渡邊前校長の名古屋赴任と同時にあつて停車場は其の見送人で難言を極めた爲め平素格別深厚な友誼を蒙つて居つた同教授と親しく袂別の挨拶を交はす事も得ず出發したのですが私が東京に滞在中突然私の假の宿に訪問せられ少し話がしたいから一諸に外出してくれとのことで有樂町附近をブラツキましたが一

寸適当な休場所も見當らなかつたので日比谷大神宮の玄關前に立つて此次に生れ變つたら此處で神前結婚をして花嫁花婿の寫眞を新聞や雑誌に出して貰ふではないかなどと笑談をいひながら用談を終へて別れたのが最後の會見であつたのです。私は翌年一月十七日横濱出發途中各地から其時々之感想など書き送つたが夫れは何れも同教授の死後配達されたのでした夫れから私は二月十三日にボストンにつき翌日ブルックラインの下宿に移つたその時同宿の日本海軍將校から「君の學校のプロフェッサーの死亡廣告を數日前の時事新聞で見たと聞き誰れであらうかと種々推測しましたが私か出發前に病中の人もなし又急に死にさうな人もなし全く見當がつきません早速新聞を繰り返して見ますが何分一ヶ月も積み重ねてあるのですから遂に見つからず之れは何かの間違ひだときめて居た處其後一週間もしてから例の軍人が「君あつたよあつたよ」とて示されたのが大西教授の死亡廣告ではありませんか此の時位驚いた事は今迄にありませんでした實は最初話をきいた時甲教授か乙教授かと考へて見ましたが大西教授とは全く夢想だにせなかつたのですから全く茫然自失の状態になりました。同教授の學界に於ける功績等は夫々他の諸君から述べられる事と思ひますから省きますが唯同教授は學者であると全時に最も熱心な良教育者であつた事を申してをき度いと思ひますナイアガラの瀧と野球以外に米國で見るべきものは何もない余り長く米國に居るなど全教授に注告せられた私が一年半も全國に在留しましたが歸朝後其の辯解を聞いて貰ふ事の出來ないのが非常に遺憾です。

室谷賢次郎

御質問に對する小生の返答を左に申上ます。

一 大西教授に就て小生の有する追憶と致しましては 残念乍ら一度も親しく教授の聲咳に接することを得ず 従つて其の直接の指導を受ける機を得なかつた爲めに「伊太利の旅」と「囚はれたる經濟學」の二著を通じての追憶以外には殆ど何物もありません 併し 之は追憶といふ言葉の嚴密な意味に當嵌らないやうに思ひますから申述せずに置ませう 唯 教授の逝かれる日の前後の出來事を後から考へ合せて想ひ出すと一つありますからそれを言はせて頂ませう。其の日は確か日本の元勳山縣有朋公爵の國葬の日であつたと覺えて居ります 國葬日のことですから小生の通つてゐた一橋の商科大學も勿論日常の課程を休みました 併し小生の恩師左右田喜一郎博士のゼミナールだけは規則通りに麴町の御宅で午後から開かれることになりました 博士が此の日開口一番「日本では殆ど軍人許りが國葬にせられるが偉大な文學者が國葬になる日が來なければうそだと思ふ」と語られたのは今も尙耳に残つて居ります ゼミナールは例によつてカントの批判主義を基礎としてのディスカッションです 途中で僅か十五分間程休憩をしただけで數時間といふものは口の酸くなる迄息の苦しくなる迄鋭い論理の糸が師弟の間にそれからそれへと辿られるのです 恁うして終りに博士の透徹した斷案が下される時小生等の抱いて居つた種々の疑問は悉く氷釋せられ 後には唯未熟な思索が 一段深く掘り下げられて行くといふ意識のみが強く明かに

残るのでしたゼミナールが済んでから話が始まりました其の時の話の序に大西教授の病臥中であることを聞かされましたが實は小生は左して重態ではないのだらうと考へて別に氣にも止めませんでしたそして寧ろ教授のものせられた評論「丸鬚の心理」に對し左右田博士があの一編だけは「ジムメルを學んで相距る數千里」であるといふやうな批評を加へられたのを面白く傾聴したのでした。ところが翌日學校へ行つて見ると掲示板の所に大西教授の訃報が傳へられてゐるではありませんか 前日病臥中であることを聞かされて居り乍らも小生は此の訃報が餘りに突然であるやうに感せられて暫くは本當かと信ずることができませんでした否 本當だと信じたくはなかつたのでせう 併し 愈嘘でないのだと考へると其の瞬間堪われない程の愛惜と後悔との念に襲はれました 愛惜の念は日頃親しんで居る教授の論著によつて更に其の新たなものゝ現はれるのを待ち望む機會が永遠に失はれたことです 後悔の念は前年の末東京で開かれた社會政策學會の講演に教授の容姿に接する時を有ち乍ら之を逸したことです 小生は何がなく教授を偲ぶよすがにと圖書館の「囚はれたる經濟學」を手につけて見たい氣持に驅られました。

手に取る此の書も今は遺著となつたかと思へば坐る此の中に展開せられた該博な智識と 豊富な情操との持主にせめて一度なりと現實に逢つて置きたかつたと 懷慕の情に打たれざるを得ませんでした 此の書こそは小生に取つては眞實のところ 河上博士の「貧乏物語」と共に學生時代のオーアシスだつたのです。小生は思はず此の書の後の方に

“Toll for Onishi Onishi is no more,, 8, 2, 1923,

と薄く鉛筆で書き込んで了ひました 商大圖書館の藏本に今でも

若し右の文字が消えずに残つてゐるとすればそれは小生のした落書です 以上が先づ小生の教授に對する追憶になりませうか 因に現在でも小樽高商圖書館に收められてある大西文庫を手にするときまた 其の以外の目ぼしい書物で餘白に。“sehr geistreich!,,とか“nichts besonderes“とか書込まれてあるのを見るとき常に教授を追懷畏敬せずには居られません。

二 次に大西教授の學問上の功績として數へらるべき點に關し小生の見るところを申述べますならば 之は經濟學の認識的根基を究明することの必要缺くべからざる趣旨を普く生徒に傳へられたのが第一であつたと思ひます 現に教授の「囚はれたる經濟學」の序に次の如く書かれてあるに徴しても 教授の期する所 そして應てその功績の中に加へらるべき個所が窺はれるのではないでせうか。

「援を哲學に乞ふ事に依て 經濟學に一新生面が開かれ得るや否やは 正直に云つて今日尙は未決の問題である 餘り多くの希望を之に打ち懸くるは 時に我等を襲ふ諸種の幻想の中の一つであるかも知れない。然り乍ら 法學博士左右田喜一郎博士の「經濟哲學の諸問題」と云ふ如き意味深き著述が現に我等の眼前に突き附けられてある以上 今日の經濟學は 單純なる敬遠に依て之を 黙殺し去る程 寡欲なる可き權利を有たぬ。但此過激に貴族的なる領域に高踏せる著書に代表せらるゝ新傾向を正當に理解し經濟學界に占むる其地位如何を會得しやうとすれば 我等は先づ遡つて 是が背景たる經濟學の過去の全部を認識論的に分析討究する必要がある 従つて文化科學派經濟學への入門たると同時に 經濟思想發展の哲學的追隨たる書物

正しくは、全經濟學史の哲學的解剖なるが故に始めて併せて文化科學學派經濟への序論たり得る書物の公刊は論壇が社會問題に獨占せるゝに拘らず否、輕佻なる勞働問題論さへ横行する世なればこそ、寔に焦眉の要求である。と察する筆者は自ら揣らずして、此一卷を眞勢なる讀者に提供する。」云々

茲に一言大西教授の爲め辯じて置きたいことは教授は左右田博士すら許す「才人」であつた爲めに「國民經濟雜誌」第廿八卷第四號の左右田博士の批評参照) 動もすれば「詩的遊戯を試むるもの」とせられ(本庄博士著經濟史研究) 或は「二本の指で挟むことの出来るやうな玩具」を描くものとせられるのですが(大熊教授稿「アダム・スミスの漫畫化」小樽高商校友會々誌第三十五號) 之は教授當時の根本問題が何に向けられて居つたかと再思すれば、瑕謹として恕せらるべきものと信ずること是非せず、經濟學認識論の處女林こそは教授によつて開拓の斧を振はるべき方面であつたと察する小生には、教授の永眠により學界の受けた損失は決して小でなかつたと考へられます。

三 最後に、大西教授若し今日ありとせば小生は如何なる希望を教授につなぐかといふことは、少し意外に聞けるかも知れませんが申されません。何故なれば小生如き者の希望如何に拘らず教授は教授自身の信ずる所に従ひ、独自の路を歩まれたことであらうと推測せられるからです。夫れにも拘らず強いて希望は無いかと問はれるならば、小生は只々後に至る我等の爲めに、凡ゆる機會に於て示教を惜しまれぬやうにと切に願ふばかりです。以上

(一四・二・一四)

大西先生の事

宮崎省三

近頃商用以外には筆を執る機會が殆んど無いので、あらたまつて何か書かうとすると非常に臆劫に感じます。漫談で御ゆるし下さい。

大西先生の教を受けたのは私達が一番先でした。先生も初めて教鞭を執られた譯で、大變な意氣込で、下宿へお訪ねして質疑などしても眞劍に教へて下さつたが、一体に講義が難しいので遂に嘔みこなせずにはしまひました。先生の講義はクラスの一番出来る者を標準とするのだと度々先生にきかされました。

先生自身非常な勉強家で、何時もお訪ねしても必ず本を讀んで居られました。私が東京の豫備校へ通つて居た時分高商の專攻部に居られた先生が、下宿を探しに行つて、其處のおかみさんと室代の事など、本を讀みながら交渉した、といふ噂をきいて驚いたものでした。

學生としての先生の勉學法は、總ての學課を甲のどれる程度に勉強し、自分の好きな學課はそれ以上に深く勉強するといふ仕方だつたそうです。これは先生からきゝました。

先生の文章は技巧澤山で、講義にも多くの美辭麗句が並べられましたので、口の悪い學生は、植物園の様だと言つたりしましたが、言葉——ひいては語學については多分の才を有つて居られたやうです。郷土の訛は餘程洗ひ落されても最後にアクセントに遺るやうですが、先生の言葉にはそれが無く、唯稀に「行きま

ほか」といふ語をきく丈でしてイタリ一語なども直ぐ覺えられたといふ話ですが尤もの事と思ひます。

先生が百二十点とか百四十点とかいふ点を付けたといふ事はよく話題に上りますが 私が函館商業に居た時分 田中逸平先生といふ支那語の先生がゐて 此先生もよく百何十点といふ点を付けました。(此先生も非常に偉い人で 單なる語學の先生でなく 思想上深い影響を與へた人です) これは割増金のやうなもので學生にとつてこんな有難い事はありません。校規がゆるすならばどの課目でも成績の特に優秀な者へはごしどし割増をしてやつて貰ひたいものだと今でも考へて居ります。

妖折した才人としては 先生の外に石川啄木にも親しく話す機会を私はもちましたが 若くして有名になる位の人には 才の外に多分の「熱」があるやうに感じました。此の「熱」ばかりは ひとへ移せないものと見做まして 先生の教を受けた者も 私をはじめ多くは録々として 几庸な生活をしてゐるのはお恥しい次第です。

大西先生を憶ふ

西尾清一

大西先生は學者として 將來我が經濟學界を背負ふて立つ第一人者であつたことは申す迄もないが 又た稀れに見る人格者であつた。而もそれが學者肌の堅苦しい人格者でなく 寔に寛濶なる心の持主であつた。

私と先生との關係は 創めは先生の下宿へ頻りに出入したといふ程度のものでなく 講義の嶄新明快な教授 而して新進有爲の學者として 大なる敬意を拂つてゐたもの

である。それが演説騒動があつて以來 頓に親しみを感じるやうになつた。

演説騒動といふのは 私の在學二年であつた時に 私の演説に關して起つた事件である。演題は忘れたが 其當時に在つては 甚しく社會主義的であり 且つ教育勸諭に論及したところが不敬だといふので 賛否双方に分れ どうなることかと殺氣講堂に滿つる狀況を呈した。其當時先生は研究部の部長であつて 當日も渡邊校長等と一緒に聽いてゐられたが 喧囂裡に猛然と演壇に上つて 凡そ三時間に亘つて 釋明のため大雄辯を振はれたので 其の場はそれで無事に納つた。春淺い季節であつたため 講堂は薄暗くなり 顔も見えない夕暮に 先生の演説は 一語は一語より 熱を帶び 滿場たゞしんとして 全く先生の熱辯に魅了されてしまつた。劇的光景と云ふても決して誇張ではなかつた。

その當日はそれで納つたものの 暗雲が全く一掃されたわけではなかつた。當時の私は極めて單純なものであつたから 私としては 先生が巧に危機を收拾してくれて有難かつた位に思つてゐたのであるが その翌日になつて 或同級生が私の下宿へ来て私のために釋明の勞を取るから 演説の草稿を 貸してくれないかといふことであつた。私はその義侠心に動かされて 即座に原稿を渡した。それから數日を経て 渡邊校長から呼ばれて 校長室へ行くに 前に友人に渡した原稿を突付けて 二三箇所質問された。この時に至つて 創めて 曩に釋明してやるといふて來た友人が 反對側の問者であつたことを知つたが もうこれでは何とも動きが取れないやうに思はれた。何よりも先生に其筋の壓迫が來ては大變だ 自分で處決するより外ないものと思ひ 先生へ宛て、私さへ退學するなら 事件が解決すると思ふからと 退學願書を送つた。之に對し先生は 書面を以て 残念ではあらうが 學生としては 學業が目的であるから この目的のためには 長いものに巻かれて 退學を思ひ留るがよからうと 退學届を返送して來た。それから又數日を経て 坂本教授に呼ばれて 在學中演説を停止するといふ判決を受けて 段落を告げた。大西先生は 其の間 私のために非常に斡旋されたりしく 私は今日に至る迄 その情誼を有難く感謝してゐる。此騒動は私一個人に對する排斥といふよりも 寧ろ啓蒙派と保守派の争闘であつて 偶々私に依つて内訌を爆發させたものであつた。それから一ケ年位の間に啓蒙派も 保守派も夫れ夫れ淘汰されて 卒業頃迄には平穩無事に去勢されてしまつたやうである。此事件に依つて 私は大西先生の厚情に太く感動させられたと共に 渡邊校長並に坂本教授にも親しみを感じるやうになり 私としては禍を轉じて福としたるが如き觀があ

つた。先生は私達の在學中に留學の途に上られたが、御歸朝後に於ては、御上京の折には大概お目にかかるやうにしてゐた。又た私も北海道に歸省すると必ずお訪ねするこゝにしてゐた。御歸朝後の當座は、學校の下手のお寺に下宿してゐられ、私の訪問した時に、西洋から持て歸れた名畫の寫眞を澤山見せて、その内から一、二枚割愛してくれたのが、今では遺品として我が家に飾られてある。先生は文學、美術、藝術等に對しても造詣が可也深かつたやうである。

それから一年程後であつたかと思ふが、二度目に小樽を訪ふた時には、母上が來られて一家を構へて居られた。一緒に散歩しようと私を伴れて賑かな街の方へ往かれた。多分中島屋であつたと思ふが、藝妓も來てなかい、賑かであつた。謹嚴な先生とばかり思つてゐたのに、その洒々たる態度に太く驚いたと共に、酒問の斡旋も頗る巧なるに、更に驚かされた。それで先生に向つて、何處でこんな修業を積まれたかき聞くと、學生でない人に、學問の講義でもあるまい、飯島君(幡司)とも先達突き合つたよと言はれた。尠も先生の御結婚前のこゝではあつたが、要するに、遠來の客に對する慰安のつもりで、斯る場所を擇ばれたのであつたらうが、御洋行以來の變化でなかつたかと思はれる。キビキビした先生の態度には、女でも惚れ込まざるを得なかつたらうが、ついぞ浮名を耳にしたこゝがなかつた。

約束は堅く守られる方で、手紙の返事なども、すぐ下さつた。先生の御洋行中、京都の留守宅に不幸が起つたので、不取敢申意を表して置いたら、御洋行後早速懇々御禮に來られるが如き、又た或時、如水館で私達と會食中、偶々隣の食卓に、鹿野教授の居らるるを發見し、起立して敬禮されたるが如き、先生の禮儀に厚きに感服したものである。

先生は學者として、業的の心思を多量に有せられたと共に、又たその牛面に於て、瀟洒的趣味も甚だ豊富であり、決して嚴格の一本調子でなかつた。従つて先生に接する者をして、春生發育萬物の感を抱かしめた。先生との交際に於て、感得したるところを約言するに、先生は三分の俠氣を以てして、而も一点の素心を失はぬ人であつた。

先生は津村福田兩博士に深く師事されたやうであるが、學問研究上に於ては、屢々恩師を論駁されたこゝもあつたが、師弟の情は非常に濃かであつたらしい。先生が白足袋紋付袴で講壇に現れ、嚙んで吐出すやうな口調で、洒々數千言、而して時々ボカッと口を開けて、窓外を眺められたるが如きは、全く兩恩師の態度を自然に攝取さ

れたものでないかと思ふ。然しこれは決して傲つて及ばざる亞流ではなかつた。教師の感化といふものは、内外共に大なるものであると思はざるを得ない。それから紺袴廣を着て、書物を手に、地獄坂を、頭をふらふらさせながら、通はれた姿も彷彿として眼前に浮ぶ。又た洋行後に於て、和服に靴を履き、洋傘を突いて、銀座を散歩された姿も忘れ難い懐しい思ひ出である。

先生の學問上に於ける功績については、之を宣明する人が他にあると思ふから、之れを略するも、たゞ私の最も感じたるこゝは、私達に對する講義の殆ど全部が、國民經濟雜誌或は國家學會雜誌に依つて發表されてゐたことである。當時賣出しの少壯教授としての政策であつたかも知れないが、其の意氣の旺なるには全く敬服に堪へなかつた。又た所謂新人達が資本家の横暴を憎むあまり、資本そのものをも排斥せむとするに對し、その混ずべからざる所以を喝破されたるが如き、當時に在つては、時流に阿る者への頂門の一針であつたと思ふ。「囚はれたる經濟」から、聽て放たれたる經濟學を建設することが、學生畢生の大事業であつたと思ふが、天が此人に歸を與へずして、早世させたことは、我が經濟學界の一大損失と云はなければならぬ。

學校の問題については、始終心配してゐられた。同窓會をも屢々鞭撻された。先生の名聲が、隆々として、經濟學界に認められて來て、小樽から引抜かれはしないかき心配したこともあるが、小樽に適當なる後任者が出来る迄は、立籠る堅い決心を持つてゐられたやうである。

これがため、渡邊校長の兩校長兼任に反對であつたと共に、自分も兼任しないと云つてゐられた。先生が小樽高商發展のため、昇格基金の必要を主張されたが、それが先生逝いて滿三年後の今日に至つても、さつぱり捗々しくないこゝは、甚だお恥しい次第である。三年祭を迎ふるに當り、昇格基金の充實に向つて、一步を進め得るならば、先生は最も喜ばれることであらうと思ふ。

大正十一年二月八日付令夫人からの手紙に「大西儀東京から歸つて以來、身体が不快の由申してゐましたが、二十五日頃から四十度近くに發熱し、風邪との診斷であつたが三十一日になり、腸チブスと判明、一日に隔離病舎に入院しましたが、まだ熱が定らず、困つてゐます。二三日中には下ることと思ひます。右のやうな次第で、暫く音信不通になるこゝと思ひますが、悪からず思召し下さい」との通知があつて、大いに心配してゐると、間もなく逝去の報知を取つたやうなわけ、健康上、殆ど申分ないと思はれてゐた先生が、もろく死なれたこゝは返すまゝも遺憾であつたが、先生の

靈は永久に 緑ヶ丘に 毅然として留るやう 意義あらしめたいものである。(終り)

故人のこと

文部省社會教育課長

小尾範治

大西教授が亡くなられてもう満三年の月日は流れたのだと思うと 時間の流れの速い事よりも 自分の歩みの遅い事が何よりもしみゝ感じられる。それにつけても吾が故人のやうに一刻も止りためらうことを肯じなかつた人が生きて居られたならばと今更に故人が偲ばれる。實際故人のやうに不斷に生々進展の歩を續けられた人は世にも稀れであると思ふ。それほど故人は精力に富み活動を好まれてゐた。讀書をしなければ物を書く 談をしなければ散歩をするといふ風に絶えず心身を働かせねば止まないのが故人の眞姿であつたやうに見ゆる。しかもその活動に些かの無駄が無く必ず何等かの意義と内容とを托してをられたことが凡庸の企て及び得ぬところであつて これは偏に故人の頭腦の明敏と鋭犀と 延いては多面であつたことに歸するものと思ふ。一を聞いて十を知るとは眞に故人のことであらう。又故人ほど多面なる生活を生活した人も稀であると思ふ。殆んど有らゆる學問 有らゆる藝術に對して深い理解と造稽とをもつてをられた。恐くは自然科學と宗教とにはあまり立ち入つた興味をばもつてをられなかつたやうであるが その他は眞に往く所として可ならざるなき概があつた。たゞ あまりに明敏なる頭腦の所有者であつたことが時

に深い省察を妨げ あまりに廣い關心が時に内的生活の中心を得難くせしめた恨はあるとしても あのやうに明かに觀 あのやうに廣く味ひ得た故人の豊かなる内的生活は 故人の短い生涯を意味附けて餘りあることと思ふ。とはいへ吾々の煩腦は故人がより永い生活を續けられて その仕事を完成され その生活を生活し盡されたならばと 還らぬ繰りごとに故人を追慕して止まない。

先生を憶ふ或る友の書簡

R. M 生

先生の訃音を耳にして間もない 突はげしく雨戸を打つて身も心も滅入りさうな或る夕 東京郊外の客舎で私は 夢にも豫期しなかつた或る友からの書簡を手にした。封筒の裏に記るされた友の名と いつも第一合併教室——今の實踐管理室——の隅つこにジーツと物を考へてゐた友の姿とを想ひ合したのは 幾枚もの業務用便箋に走り書きされた長い書簡を読み返へした後であつた。それ程私は此の友から そうして多くの友から離れて緑ヶ丘の生活を送つた。無言の裡に一室に會し 無言の裡に立別れた同窓の一人から 先生の死が動機となつて 此のやうな親しみ深い手紙を受取らうとは何といふ不思議な出来事であつたらう。此の友に初めて私は 物靜かな 然し鋭い人生の觀察者を見出したのであつた。

先生を憶ふ友の書簡は 足掛け四年後の今もなほ私の篋底に收められてある。恐らく友の豫期しないであらう此の機會に 私が獨斷でそれを公けにしようと思ふのは 逝ける先生の姿が 教へ子の一人にどう映じたかを知らんがためである。之がために私は今 幌内の炭礦に職を俸じつゝある友の寛容を乞ひ さうしてそれと同時に友への畏敬の念を新たにするものである。

× × ×

僕は君と語つたこともないし 君に宛てて手紙を書いたことも嘗つて一度もなかつ

た。けれども あの事件前後——これは君に取つて不快な記憶だらうが若し爾ふならば 追憶のよすがともなるだらう僕の書きかたを許して呉れ給へ。——を通じて僕は君を知つた。もつと端的に云へば君の「在存」を痛い程に感じたのだ。其處に「眞實」を欣求する求道者のふるへているやうな若い魂のなやみを はつきり知つた。誰れでも其の生涯の運命を決定して仕舞ふやうな運命的な一刹那があるものだと思ふ。恐らくは あの事件は君に取つて運命的な一刹那であつたらふ。而して君は運命に依つて定められた 白金の路を只一筋に靜かに進んでいつた。僕の記憶の中には鮮やかに君が生きている 君が夢にも豫期していないだらうこの手紙を君に宛てて書かふと思ふのも 君が話相手として 今の僕に取つて最も ふさはしいと思ふからです。

「大西先生の死」急報は君の驚愕と悲哀に迄達したてせふ なんと云ふ運命の惨酷さだらふ流行性寒胃で河邨病院へ入院したと云ふ短かい消息を新聞で見て しばらく経つてから 腸チブスと確定して隔離病院へ隔離せられたと云ふ再度の消息が あの赤土の手宮を聯想させて此の頃の寒さにと心を痛ましました。

けれども誰れが死を豫期し得たらふ。僕は人間の弱小を泣笑する。——越へて四五日だ。其處に黒欄永しへに僕等と交渉を絶つた先生の名が見出されたてはないか。

思へば僕は先生から遠く離れてゐた。限りない讃仰の心を抱き乍らも僕の魂の底に潜む全ての權威に對する悲しき反逆性と 大いなる人格に依つて壓倒される弱小なる自己の可憐ささ もう一つは 如何なる人間にも避け難い人間としての普遍なる弱点を先生に於て見るここの苦痛なるさの故に 僕には先生に近づいてゆくことは出来なかつた。それ故に 僕は人間としての先生に關して余りに多くの智識を有たぬ。僕の知つている先生は あの外遊から歸つて まだ餘り間の無い頃の講壇に立つての先生だつた。情熱を聰明な理智でおし包んだやふな先生だつた。玲瓏として 玉のやうに透き通つた觀照の世界に 飽迄も物の眞を見究めやうと思ひ詰めていらしたやふな先生だつた。

——而も「伊太利の旅」に其の片鱗を現はした先生のあのなつかしい人間味は如何だ「囚はれたる經濟學」——如是閑氏の批評を君は見ましたか。確か新刊書紹介の爲めに出来てゐた著作評論さか云ふ雑誌に出ていた相ですれ。それを見ないのを僕は未だに憾みさしていますが。——に其の藎著の一端を鋭く閃めかしていらつしある先生のあの素振らしい學識は如何だ。確か去年の春の社會政策學會にも 先生はあの先生獨特の人生觀を織り交へた報告を なされていすね。

——學會の會報も 勿論も僕らの眼に觸れ得る程の處に有りませんから 見やふたつて見られませぬけれど——。其の結論を推察するに都合のよい先生の「社會政策形而上學」が改造に出たのを見ました。

いま先生を失ふことは どんなに忍むても 忍び切れない大きな嘆きだ。僕のこの言葉の裏に包まれている悲痛な感慨を 本統に實感を以て肯定して呉れる小數な人の君は確かに一人であつて呉れるにちがひないを僕は信する。先生には まだ まだ 爲す可きこゝが多かつた。先生御自身の爲め計りでなく學問の爲めにも 大きく云へば人類の爲めにも。僕自身の問題から云つても これから本當に完全に導いて貰はなければならぬ 教へて戴かればならぬ多くのこゝがあつた。

君も亦恐らく爾ふてはなかつたらふかと思ふ。人間としての先生に僕よりももつと親炙していた君だもの——其の点に於て僕は君が羨ましいやふな氣がする——哀切の情が一層身に迫るものがあるだらふと思ひます。離れていた丈に僕は——高い山の頂に立つていた目標が消へてなくなつたやうな寂しさ。なつかしみの充ちた悲しみを靜かに噛みくだくやうに感じます——それにしても どうしても我慢が出来ない程先生の爲めに残念な あれ丈けの學問さ あれ丈けの見識をお有ちになりながら 學問にふさはしい優秀な門下生が居なかつたこゝ 見識に相當した名聲もまだ 出来なかつたこゝです。先生がお聞きになれば 一笑に付してお仕舞になるだらうけれど教へを受けた末輩の身としては残念がる方が至當なやうな氣がします。全ては これからであつたのに。

——今日は先生の御葬式の日です。あまに残された人達の身の上を考へるのも僕に取つては痛ましきの極みです。 二月十二日 T. T 生

M 兄 机 下

大西君に就いての思出

神戸高商教授

坂西由藏

大西君は明治三十八年三月京都商業を卒業し 同年四月神戸高商に入學せられました。私も京都商業の出身者(大西君より十一

年前の) でありますので 神戸高商學生中の京商出身者によりて組織せらるゝ友團の會に出席して 大西君を識るに至りました。同君も時々同友團の人達といつしよに私の宅に遊びに來られました。

大西君は雄辯の人でありました。明治三十九年の春私は學友會の講演部長になりましたが 當時部の委員中に大西君が居られました。「茲に萬國歴史の一頁は吾人に命じて曰く。汝雄辯なれと」——かく大西君は絶叫せられました。忘れることの出来ないのは其の年十二月十五日に開かれた講演大會であります。其の計畫には大西君の與かる所頗る大なるものがありました。各學年各組の選手が 試みた十分間演説を數名の教授が審査して優良なるもの一等より五等までと定めました。其の時の大西君の演題は「希臘を論じて吾人の使命に及ぶ」といふのでありましたが 審査の結果 第一等は八十九点 第二等は八十八点で 大西君のは第二等でありました。

大西君は意志の人でありました。そうして押しの強い人でありました。

私は教室に於て大西君と會する機會を得ませんでした。といふのは 當時私は本科三年で商業史を 豫科一部 (中學出身者の組) で經濟通論を擔當して居りましたが 大西君は豫科時代には第二部 (商業學校出身者の組) に屬して居た爲に私の經濟通論の講義に列せず 大西君が本二の學年を終らんとしつゝあつた明治四十年三月に私は留學の途に上つたからであります。私の留學中に大西君に取つて面白くない事件が起りました。それは 如何なる理由に基いてか同君が同級生からボイコットせられたことではありません。大西君は當時ミュンヘンに滞在中の私に之を知らせて來ま

したから 私は「理由の何たるを問はず同級生から絶交せられるといふのは君の不徳の成す所である。君は同級生の前に立つて許して呉れといふことは出来ぬか」と答へ また「君の名の猪の如くに突進する前に一寸でよいから考へて呉れ」と云つてよこしました。大西君は 私の忠言を容れて同級生に謝したそうですが 少くともミュンヘンと神戸と手紙を往復した二箇月餘の間は黙々として圖書館の閱覽室に勉強した筈であります。同君の處女作「帝國主義論」の基礎は實に此の間に築かれたと傳へられて居ります。

大西君は明治四十二年に神戸高商を卒業し 轉じて東京高商專攻部に入り 四十四年卒業後小樽高商に赴任せられました。同君は時々小樽の寒さを訴へられました。私は 自分が若し神戸高商を放逐せられたならば 寒威凜烈なる小樽へ行きたいものと申しました。けれども 今にして思へば 私は寒い小樽を望んだのではなく 我が大西君の居る小樽を慕つたのであります。

大西君は學生時代から時々私の宅に土産を持つて來て呉られました。私は「ごうも京都の人は土産物なんか持つて來ていけない」と申しましたら同君は「態々土産物を持つて來て 怒られては引き合はぬ」と笑はれました。小樽に行つてからも 相變らず北海道名産を送られました。燻製の鮭だの 鮭の筋子だの、味は之に依つて教へられたのであります。今も此の筆を執りつゝ神戸の「氷室」といふ冷凍魚の賣店から買つて來た筋子で一盃を傾けて ありし昔の追憶に堪へかねて 酒と共に落つる涙を飲みほしました。

大西君が海外留學の途につかれたのは 大正二年のことでありましたが 私は同君から當時巴里滞在中の左右田君に紹介狀を書

くようにと頼まれました。私は其の紹介状の中に態と「僕と大西君とは「師弟の関係がない」と書いてやりました。さうすると大西君は「師弟の関係とは教室に於て一人は高い所に立ち一人は低い所に座つて居ることですか」と詰問せられました。それでも大西君は其の紹介状を持つて巴里で左右田君に會せられました。其の時に未だ佛蘭西語の話せなかつた大西君は 獨りで食事することが出来ぬからと云つて 左右田君に數回分のパンを買つて貰ひ それを兵糧として 毎日、ルーブルに通はれたさうであります。

大西君は また文の人でありました。「囚はれたる經濟學」の著者はまた「伊太利の旅」の著者として廣く知られて居ります。但し私は大西君の文體を好まず 殊に「小西虎雄」といふ變名を用ひられた。ことが氣に入りました。私は此のことに就いて時々大西君を攻撃しましたが 其都度同君は哄笑するのみでありました。

私が大西君に會した最後の機會は大正十年十二月東京に於ける社會政策學會に出席した時でありました。會後東京帝大の門を出で 本郷通りのカフェーで大西君高島君及び神戸高商の福田君平井君と快談したことを想ひ起します。其の翌々日社會政策學會々員は松竹の活動寫眞映畫の撮影所を縦覽しました。其の歸りに福田先生左右田君大西君及び私の四人が食事を共にしましたが あの時にも大西君の文章に就いて三人でさん、油を取りました。私は其の夜神戸に向つて歸りましたが 東京驛まで見送られた時が大西君との最後の別れでありました。其の後大西君は伊豆の伊東に遊び 一月小樽に歸任し からだの工合が悪いからとて約束の國民經濟雜誌への寄稿の延期を求められたのが同君自筆の最後

の通信でありました。

それより二前年の事です。私は小樽高商には濟まない事ではありますが大西君を是非神戸高商へ迎へたいと考へまして 水島校長に頼みました。前教授津村君も豫てより同様の希望を持つて居られました。さうして水島校長も御同意になりましたので私は大西君の都合を聞いて見ました。私は大正九年四月から大西君が神戸の人となり得ること、楽しんで居りましたが機遂に熟せず 此の話も中絶の止むなきに至りました。若しあの時に大西君が轉任することが出来て居つたならば 大正十年の冬伊豆へ遊びに行くといふ様なこともなかつたかも知れません。恐らく京都にでも行つて居られたでせう。伊豆に行くことさへなかつたならば チブス菌を宿して歸るといふこともなかつたであらう。私は此のことを思ひ出す毎に残念でたまりません。大西君は小樽高等商業學校教授として逝くことを満足せられたに相違ありません。けれども 私は 大西君がたとひ小樽と其の高商とに背くの批難を受けられても 母校に歸つて天壽を全うしてほしかつたのであります。

(大正十四年二月二十四日夜)

大西先生が博士になつたこと

佐藤正雄

第一回の巡回講演旅行のときの事です。講演會といふものに對する好學的な氣持——と曰ふよりも「兎に角野付牛迄來られて綱走へ寄られないとなつちあ町の体面に關する……」と曰つた様な筋合のものでしたが 随分熱心なものでした。

千に近い聴衆をたつぷりこ入れた北見劇場の舞臺に立つて鈴木君や林君が油の乗り切つた演説をして居るとき 旅を流れて歩く萍の役者たちが心なくも書きちらした樂書の一ぱいある樂屋では大西先生が網走町の有志連から膝詰談判をされて居た。

その結果大西先生がさうさう敗けてあくる日の帯廣での講演會は一日延す様に電報を打ち豫定を變更して網走町へ乗り込むことになつたのです。

網走町では餘程うれしかつたんでせう。停車場に近づいてゆく列車の窓からホームを見ると大層な人が出迎へに出て居ますし列車がすうつとホームに横づけになるかならぬかに雨催ひの空にさくろく爆竹の響が四つ五つ さ曰ふ何しろ花火をあげての歓迎でした。

僅かな列車内の時間で所産とはとても思はれない實に多方面からの引例と（それも知ちがひの文學でしたが）豊富な内容を相變らず先生一流の光つた觀察とから成り立つて居る「文明批評としての文學」が大喝采裡に了へて宿へ歸つたその夜。

冷たい雨が窓ガラスを 水を一握りにして打つつける様に叩いて五月も末さ曰ふのに網走町の夜は十一月の寒さ寂しさでした。先生を初め皆が一つの部屋に集つて大きい火鉢を圍み乍ら繪葉書をかいたりその日の演説の批評をしたりさてはもふそろゝ小樽が戀しくなつた話などをして居た時です。誰だつたかが一枚のチラシをもつて入つてきた。

「あゝ先生。ちよいと此奴を見て下さい」さ曰つてそのチラシを先生の前においた。覗いて見るにそれは今日の講演會の宣傳廣告で その講演者の所には初號活字でくつきり「小樽高商教授 大西博士」さあるのです。

「いやあ 博士だ 博士だ」

「さあ先生今晚は一つ奮發して下さい大西博士さあつちや只はおかれぬぞ」

「いゝ辻占だ。いゝ前兆だよ。何か色をつけて貰はなくちや……………」

何さ曰ふこゝもなしに嬉しくなつてしまひました。一枚のチラシを見てわいゝと騒ぎ出した。

博士の肩書が母校に乏しいさいふこゝへの肩身せまささいふ様な 小さな不純な考へではないのです。一度でいゝ先生の講義をきいた者は先生が博士級の頭腦をもつて居る 否さらに加へて若々しい熱さ力さ美しさをもつて居るさいふ事を肯かすには居られないのです。それが學士さいふ名に於て世間の人達ら簡単に評價されて居るさいふこゝに對して感ぜざるを得なかつた若人らしい義憤さ先生への信頼からであつたの

です。

だが先生はそのさき妙に歪んだ様な顔をして それでもやはりチラシの文字が萬更氣にならないでもなさ相にちらゝと視線をすべらせ乍ら 微苦笑を漂はせて居た。

「新聞辭令つてのはよくあるが チラシ辭令つてのはね あんまり聞かないなあ」

さ誰かが曰つたのでドツと哄笑がわいた。

「だが併し 何ですな。先生も一つ 僕が歸つてくる迄にはこのチラシ辭令を實現しておいて貰ひたいもんですなあ」

さ手塚先生が例の妙な聲で曰ふ。

「博士か。」

博士論文は五十を過ぎてからだよ。五十になつたら書くがそれ迄はかゝん。

併し何だれ 君が歸つてくる迄には原論の方はちやんと立派に本にしておくよ」

さ曰はれた。

原論もさうさうものにならなかつたし まして五十の生も果敢なく奪はれてしまひなすつた。

大西さんが逝くなつたさき その電報を見て居ると例の博士のチラシが目につぶ。そして先生も随分口惜しい思ひで逝かれたらうと思ふとたまらなくなつて泣いて仕舞つたものでした。

底寒い二月の午後を盡きぬ涙のお送りをしてから もふ三年にもなるのですものね。

生きて居なかつたら原論はとにかくさしても、商業史か商業政策のどつちか位は學界へ提出されて それこそ大きなセンセーションをまき起して居なさるのでせう。併し 別に考へて見れば若し大西先生が生きて居なかつたなら 何れ小樽には居なさらなかつたでせう。三菱の上野さん方のいろゝな内論話をおきゝした時に 私はしみゞとさう思つた。

大西先生の死はほんとうに惜しい。口惜しい口惜しくさへもある。けれ共數々の満ち足りぬ思ひ出さ期待とを残してゆかれただけに私達の先生への慕情は一入強められるのですし 又純然たる小樽の市民として 母校の教授として別れをしたことが せめてもの慰めである」さ。

追想の斷片

佐藤光一

○

先生は平常から よく

「私のやうな ハムレットは ……………」

さいつて居られたが私は 先生を懐疑主義者だとは思はない。

私は最初 先生から冷めたい印象しか 受けなかつたが 先生は合理主義者ではない

先生は熱烈な道德家であつた。強い意志に手腕ある美術家であつた。

熱ミカミは先生の性格上の最も大きな特徴であつた。

先生は主意主義者である。

従つて先生は又情の人でもあつた。

先生を 利己主義者と思つてゐる人もあるやうだけれど 先生は ホントー は暖い人であつた。時に傍若無人といふ風な感じがなかつた譯ではないが それは打算や利己からきたものではなかつた。

○

先生は 意志の強い 頗る真嫌らひな 議論の鋭い方だつた。

突嗟の間にもよく考のまとまる人だつたから討論なぞ頗る得意のやうだつた。

社會政策學會の速記なぞよむさいつもそう云ふ氣がした。

先生はよく考へのたつ人て 何事に對しても必ず相當な意見をもつておられた。

「一言なかるべからず」といふやうな風もあつた。

「學者の生命は迂愚なるにあり」なぞと平常から言つておられたが 口も八丁 手も

八丁 才氣煥發といふ風の方であつた。

その点はこの大學の河田博士に似ておられた。

ごなたか「大西君を學校なぞに さぢこめておかずに實業界にたいせて 思ふ存分 手腕をふるはせてみたかつた」

さおつじやつたさうであるが それは意味のない言葉ではない。

先生は 學問上の傾向から 政治や 實際運動を輕視してはおられたが 事實先生にそう云ふ血が流れてゐなかつたわけではない。學校行政なぞ かなり興味を持つておられたやうである。

○

先生は頗る多讀の人であつた。

しかし よく意見のたつ人て いつも自分の意見を持つておられた。

一旦一つの考をたてられると それをどこまでも 考へぬきつきつめてあらゆる手段を盡して その議論を集中してゆくといふ風の方であつた。

いつか ホテルかどこかで 食事を一緒にした時

明日は講演があるのだが まだ まとまつてゐないから 今日早く歸へる。

一週間ばかり考へてゐるのだから まだ 結論が出来てゐない。」

さいはれた事がある。

その講演はのちになつて「闘争の心理」となつて「改造」にあらはれた。

○

大体において 先生の思索の仕方は 獨逸的であつた。しかし多分にフランス趣味も持つておられた。

それで 獨逸式の考證や うるさい脚註なぞ輕蔑しておられた。

「囚はれたる經濟學」も あれに詳細な註をつけて あの倍位の本に書き直ほしたら 天下の名著として喧傳されたであらう」さある人がいはれた事がある。

日本には 術學的な註や 間違つた引用句や 發音すらあやしい外國語を無暗矢鱈に引き出す事を以て學術的だと考へる 悪いくせがある。

先生はそれを排斥して居られた。

○

先生はいつか バンタレオニのお嬢さんのはなしをして

「あんな助手があつたら……………」といはれたが すぐ又

「しかし學問には助手はいらない

助手なしに 出来ないやうな 學問なら つまらない」さいはれた。

先生の學風は歸納的ではなかつたやうである。だから 史實や 統計ばかり 流つてゐる學者を輕蔑しておられた。

學問に助手がいらないといふ言葉も 私はその意味を解してゐる。

「囚はれたる経済學」の讀者は その最後の頁に於て こう云ふ一句を見出すであらう
 「そが(経済學をさす) 自然科学と文化科學との歧路に佇んで惑ひ煩ふは 若き學と
 しての悩みであるが 同時に又——其誇りもある」

しかしそこに問題がある。

それが悩みであり 誇りであり かゝる立場に思ひ惑ふてゐる限り それは學問として
 には到底不徹底なるの批難を免れえないものである。

「囚はれたる経済學」は數年來 私の愛讀書の一つではあるが 私は二つの學派の間に
 彷徨せらるゝ先生の立場には同意する事は出来なかつた。

しかし 又先生は 左右田博士の如く

「経済學は文化科學なり」

と断定しうる學者でもなかつた。

かやうに指摘する事は 著者の勞に對して 或ひは 情を知らざるものかも知れ
 ないけれど 私は絶えず かゝる疑問にみたされてゐた。

しかし其後(囚はれたる経済學の發表後)先生の立場にも大分變がきたやうであつた
 私の忘れる事の出来ないのは 先生の死の前年八月 私が夏休みに歸つて 御訪れ
 した時の先生の一語であつた。

「文化科學では どうもいけない」

「やつぱり 経済學は アダム スミス流にゆべきものである」

先生は後年 再び Authodox School にかへられたやうであつた。

この變化は學問的には大きな變化だといはなければならぬ。

私はこれを以て 經濟學者としての先生が本來の面目にかへられたものだと思つた
 あまりに無造作に 否定せられたスミスに 先生が再び又歸つてこられやうとは
 或ひは 恐らく「囚はれたる経済學」の讀者には 信じうべからざるほどの變化であ
 るかもしれない。

しかし 先生が どう云ふ意味で 再び スミスにかへつてこられたか 又その後
 如何なる風に發展されるか それは私たちにとつて此上もない興味がある問題である
 私か いつか 日本語でかゝれた いい經濟原論がなくて困まるゝいつた時
 「僕も雜筆は一切よして 經濟原論を勉強する そしていく原論が一冊書きたい」
 といはれた事がある。

私が随分以前から先生に期待してゐるのも實はそれであつた。

私にとつては今までよんだ原論はどれもこれも皆面白くなかつた。

私の欲しいものはやはり 一度哲學的反省によつて精練され 然るのちその哲學を
 も脱して更に獨自な經濟學の立場にかへつた人 そんな人によつて書かれた書物であ
 つた。

哲學を經ない經濟學は蕪雜で不純でよむにたへない しかし經濟學は又別個特殊の
 科學である。

だから經濟學はいつまでも その傭兵をかりてはおられない。いつか又獨自な立場に
 歸らなければならぬ 哲學者のかいた經濟學ではやはり面白くない。

丁度その頃の先生が そう云ふ立場にたつておられた。

それで私は 先生に非常な期待をかけるやうになつた。

先生が今まで 公にされた 數種の著書は或ひは長く讀者を失はないであらう。
 しかし 他の著作のすべてがたとへ失はれてしまはうとも この原論一冊世に出づる
 機會があつたならそれは恐らく先生の名を不朽に傳へたであらうに。
 そして「囚はれたる経済學」の讀者も亦 恐らくこの原論に始めて先生の全鱗にふれ
 たといふ感じをもつたであらうに。しかし今はすべて 空しい。

○

「大西さんが なくなられた。」

年は卅五とか。

卅五で死んで 先生も死にきれなかつたであらう。

君はあの山間の湖のやうに澄んだ 先生の瞳を思ひ浮べないか」

と當時 小樽にあつたBが書いてよこした。

ほんとうに先生は死にきれなかつたであらう あのまゝ、死んでばとても浮かばれない
 もし 先生に當時意識があつたなら キツト「死にたくない！」

さ一語をもらしたに違ひないと思ふ。

もし先生が かゝる一語をもらされたなら 漱石が死に面して吐いたと傳へられる一
 語になぞ到底くむ事も出来ないやうな強い執着と 悲痛さがこめられてゐたであらう。

龍はその全鱗をあらはさずして遂に逝つた。そして死はあの蘆薈をそのまま 私た
 ちの再び相遭ふ事の出来ない世界に先生をばこび去つてしまつたのである。

私らは先生の「死すべき部分」を別れる事はいつかは避けがたき事實であつたかも

これない。しかしその「死すべからざる部分」すら そのまま奪ひ去られる事に
うして耐へられやう！

○

先生は平常から丈夫であつた。
先生がこんなに早く死なれやうとは誰も考へてゐなかつた。
先生自身夢にも思つてゐられなかつたであらう。先生は自分の身体には自信をもつて
おられたやうであつた。いつも教室へ來ては。
「勉強しろい」といはれた先生であつたが
クラスの一人が死んだ時
「しかし死んではずまらない 死なない程度に勉強すればいい」と
といはれた事がある。
妙にその言葉が私の頭に残つてゐる。
「伊太利の旅」の中で
夭折せるエミール・ラスクのために熱い涙をそゝがれた先生が
その後幾何ならずして 先生自身も亦 ラスクと同じやうに弔はれ かつ惜別されや
うとはどうして考へられやう！
わからないものである。

○

先生の文章に對しては 脂粉の香が多すぎるといふのが評判であつた。
私がいつか先生の文章は面白すぎて いけないと云つた時
「よくそういはれるが 河上博士だつて 今てこそ あんな簡素な名文をかゝれるが
昔は随分凝られたものだ。
私ももう少し年をとつたり 學問がすんで來たりするさ もうあんなものは書け
なくなるから 今の中精々書いておくのだ」といはれた。
様牛が 初期の憧憬感傷の時代から脱却する時その想出のために 思ひきつて現常離
れのした ロマンティックなものをかいた事があるといふ事實を想ひうかべて 私は
微笑を禁ずる事が出来なかつた。それが瀧口入道であつた。

○

先生は好んで散歩された。規則正しく散歩をされた。
市場の時計代りにされたカントの弟子だつた先生は 又その点に於ても弟子たる資格が

あつたのかもこれない。

その道は大低きまつてゐたやうである。公園の正門からおりて 花園町を通つて妙
見町を下つて色内町をすぎて大低第二火防線から歸へられた。ソフトを阿彌陀にかぶ
つて ステッキを引づつて 何か考へながら歩かれる先生に よく町の中で會つたも
のである。

私は散歩の仲間をしていろいろにはなしをうかがうのを此上もない楽しみとしてゐ
た。それは私の最も楽しい時間の一つであつた。

○

「もう一度ヨロツパへゆきたい。しかしゆくなら若い中でないと駄目だ
頭の軟かい中でないといけない。しかしもう一度オペラがみてきたい。
シュニツツラーならこの縁側にねころんでよんでも 維持てよんでも大した違ひはな
いが オペラはそうばゆかない」と
といはれた事がある。先生はワグナーが好きであつた。
先生は音楽を愛して居られた。

○

先生から私はよく ニーチェンシュニツツラーをきいた。随分不思議な取合せては
あるが先生にはたしかにそう云ふ両面があつたと思ふ。

○

先生は子供好きだつた。それは掌中の珠のやうに可愛がられた。眼にいれても邪覽
にならないと云ふ風な可愛がり方だつた。

いつかどこかで同窓會の時

誰かが

「先生の御子さんは！」
といひ出したので しばらくは子供のはなしにはながさいた。

「君 子供さいふものは可愛いものだよ。」

細君の快樂は相對的だけれど

子供の快樂は絶体的だからね」

私たち未婚者は 先生に對して 何と御挨拶していかしげし途方にくれてしまつた

拜復

外ならぬ大西君の事なれば 故君と自分との學問上の交渉 交誼
 其他の雜惑を物したき考前々からありたる折柄の貴需故何か期日
 までに差上げむき考慮せしが遂に用向に追はれ此度は失禮いたし
 相濟まぬ次第に候

その内復折もあらばと 今はそれのみ望み居候

右御申譯旁 草々

二月廿二日

啓明會諸君 御中

津村生

○
 法學博士

關 生

尊翰昨日入手故大西君三年祭に當り 記念冊子御編纂の由御報知に
 接し 往年 全夫人より突如同君逝去の悲電に接したる時の涙を
 新に致候 小生も何か一文起草致し度と存候得共 何分多忙にし
 て不任意今日筐底を探りて 同君が留學中寄せられたる書簡の一
 を探り得て 同君自らをして語らしめ度同封差出候間 同記念冊
 子中に御加へ願度候 此書簡は大正四年英國滯留中のものにして
 同君が日本に於ける家庭の不幸に關する報知を得られたる直後の
 ものと存し候

此書簡中には同君の家庭觀 社會觀 勞働者問題 修養論等が示

されて居つて故人を偲ぶべきものが少からずと被存候 御手許に
 差出し候間可然御取計願上候 匆々不盡

二伸書簡赤線にて除くとしたる部分は公表なきことを望み候

尙原文は御序に御返送願度候

二月廿日朝

×

關 先生 座下

何よりも先に 大阪に於ける御活動が 一橋に於けるよりも働
 き甲斐があると御思召しになる有望な状態を慶賀します 日本
 の新聞を一枚もよまぬ私には之れ以上に日本の事に就て申上げる事
 はありません。私は大阪が先生によつて 前よりも立派になる事
 を祈るのみであります。

×

京都の騒ぎは私をして色々の意味で家族制度と云ふ事を もう
 一度考へさしました結論はやはり家族制度とは無意味なものだと
 云ふ事よりありません

×

「衆民衆愚の政治」と云ふ事をニエチエ派の思想家がよく云ひま
 す 此頃の英國の勞働状態政治状態を之にあてはめるとよく其意
 味が分ります。

但其衆民が自己を生んだ人達であつて 其衆愚の政治が自己を被
 統治者として行はれかけるとなると 之は少くとも少々——厄
 介であります。

×

高き道義と低き道義と云ふ事をよく教はります 高き道義は低き
 道義を奉ずる人をして 自ら其低き道義を捨て、高き道義に憧れ
 しむると云ふ事もよく云はれます。

但私の狭い経験の範囲では低い道義をもつてゐる人は 高い道義を理解する能力理解せんとする希望のない場合が多い様です 之が英國の労働者なら だから英國は亡ぶ可しとすまして居られます 自分がその亡ぶ可しと云ふ断定の中に 引きずり込まれかけると之は少々——厄介であります。

私は一度失禮をかへりみず 先生に「自己のために子供を犠牲になさい」と申上げた事があります——私は今も昔も 先生の中には 子供を犠牲にしても育て上げべき あるものありと信じて居ります。然し今日此際になつて子は自ら犠牲になれと云ふクリストの教の方が 他を犠牲にせよと云ふニイエの教よりも實行しやすい事が分つて來ました。

問題はかうだらうと思ひます。

自分にすがつて居る弱者があります。其弱者を自分の立場迄引上げて一緒に人生の途を歩めるなら申分はありません 然し其弱者が歩くのはいやだと云ふ時に 振り捨て、自分だけ進むに要する道徳的勇氣は 確に 其場所に自分も坐つてしまふ道徳的勇氣より多くを要します。

其弱者が強い者には弱い者の傍に介抱して居る以上に 道徳的任務はないと 思ひ込む場合は 一層面倒になります。

×

私は出来るだけ振り返らずに進んで見たいと思ひます 但どこ迄此決心がつくかは自分には分りません。

一層困る事は自信のない事です 一人で進めば必ずある意味ある状態に達する才能が確に自己の間にあると分つてれば問題はよほど楽になります 但進んで見ても何にもならぬとなれば 始から弱者の介抱でもした方がまだ意味があります。

×
自己其物でなしに自己の中にある天分の尊重——其尊重の爲に自己其物をも犠牲にせよとの教——之を利己主義だと解する人には ほんとの心持は分らないのでせう。

×
年をとつて衰へた人間に 新しい道義を教へるなんか 慘酷な仕事です やはり世間並に安心さした方が好いのかも知れませんが 大分妙な事を並べましたが 先生には 私が何を訴へてるかよくお分りと存じます。

×

「英國戰時經濟生活の研究」を瑞西でまとめます 材料は大分集つて居ます 種本殆んどなしで生の材料ばかりです ウィーザーズのやきなほしよりは意味のあるものでありそうです お送りした時御覽を願ひます私は職工組合といふものを疑ふやうになりました 英國の職工組合が一番進歩した職工組合であるなら 職工組合のために一生懸命になるなんか愚の極だと思ひます。

要するに労働者は労働者だと感じねばなりません。

今迄獨乙の哲學者が あまりデモクラシーに感激しないのを 一種の偏狭かと思つて居りましたが 此頃になつて さうではないのが分りました 昔の封建貴族制から一反平民主義に代つて 此平民政治が一層つまらない事を發見した人間が やはり豚は豚だと反動的貴族主義にかへつたのは當然だと思ひます 一步轉ずると之は官僚主義になります——何だか自分で自分の思想がどうなつて行くのかわけが分りません。

英國も獨乙も佛蘭西も一括して——はてはアメリカ迄入れて西洋か東洋か 歐化か國粹かと論ずる程の大膽はもう失つても好い

時です 見れば見る程 英國と獨乙とは違ひます 戸田さんの没我性主我性と云ふ議論は 日本と西洋にあてると間違だらけの議論ですが 獨乙と英吉利とにあてはめると より少い間違ひを以て適用せられると思ひます。之は私の哲學研究がも少し本物にならぬとしつかりした事は申せませぬが どうも獨乙人と英國人とは國家に對する觀念が よほどちがつて居る様です 確に英獨の戦には倫理觀念の戦と云ふ意味があります 決して日露戦争の様な 只土地の争ではありません。よほど考ふ可き問題ですと思ひます。

六月三十日 ハンザンスにて 猪之介拜

故 大西教授を憶ふ

關與三郎

故大西教授の三年祭を迎ふるに當り追憶の情洵に切なるものがあります。今回故大西教授と縁故淺からざる貴會の御質問に對し些が私の實感を申述べまして在りし昔を偲び度いと存じます。

(一)

○私の始めて先生の名を知つたのは小樽高商入學の前年あの「囚はれたる經濟學」が札幌富貴堂の書架に飾られた時でありました 開卷第一頁に曰く「經濟學は囚はれたり。之を補ふものゝ名は時に倫理ととなへ 時に豫言と稱し 時に又政治と云ふ。其名こそ如何にともあれ 赫として燃え上る可き理想 Sollen の炎が冷たかる可き現實の Sein の青き色を焼きつくさんとするに於ては一

つなり——故に曰く經濟學は囚はれたりと」實にこの一節を読んだ時でありました。私はこの一節を口誦する度に言ひ知れぬショックに打たれてなりませんでした。その後愈々先生に親しく教を受ける様になりましてからも此語は私にとって全く一つの謎でありました。而も此謎の一句は私をして常に先生を忘れしむる事の出来ぬものにして仕舞ひました。Sollen と Sein の畏に惱まざるゝ學徒に向ひ 嚴然として三尺の秋水を振翳し 呼應叱咤せらるゝの概ありやに想はれてなりません。

○先生の講義を聽いた者の誰しも感じた事でせうがあつた流暢な透き通る様な聲で宛然縦板に水を流すが如く 最も難解とせらるゝ經濟上の諸問題を縦横に論議解剖せられ 論理整然として一糸亂れざる講義振りには全く酔はされて仕舞ひました。

○先生は鋭い理知の所有者でいらせられたと共に一方非常に意思の鞏固な又義務觀念の強い方でいらせられました。常に學生に向つて申さるゝには「人間は一度其處にある以上は不平不満は決して言外に出すものではない。各自の本務に向つて最善を盡せ 若し不平不満を口外するならば寧ろ潔く速に其處を立ち去る可し」と此尊い誠の語は私達の胸底に深く沁み込んでおります。

○或時先生に經濟學研究の方法を尋ねた事がありました。先生の申さるゝには君は語學は專念に研究し給へ 二三ヶ國の言葉が自由に使ひこなされなくては駄目だらう。」と言簡なれ共學徒たらんと欲する青年の深く學ぶ可き事とつらゝ感じ入りました。

(二)

大西先生は我が綠ヶ丘學園の華と謠はれたのみならず 經濟學の三鬼才と言はれた程我學界の偉材であつた事は申す迄もありません。古今東西の學說を縦横に論議解剖せられ 從來の經濟學と

は全く面目を異にした處の新しい經濟學の樹立を先生独自の個性の中に産み出された点と思ひます。

天若し幸に先生に籍すに歳を以てせば 宛然無限の廣野を疾驅するが如き あの新人の叫びは行き詰れる經濟學界に必ずや革命の烽を擧げしめた事とせう。

私は近く出版せられんとする大西全集の一日も早く社會に生れ出でん事を希んで止みません。

(三)

先生若し今日ありとせば 現下世界學界の一大難産と目せらるゝ社會政策に對し先生の活躍せられん事を希望いたします。

大西猪之介教授著「伊太利の旅」ト

「囚はれたる經濟學」

法學博士 左右田喜一郎

(國民經濟雜誌第二十八卷第四號 大正九年四月發行所載)

日本經濟學界ノ鬼才大西君頃者書ヲ著ハス 一ニ曰ク「伊太利の旅」ニ曰ク「囚はれたる經濟學」ト。

一ハ美ノ國 アコガレノ國 伊太利ヲ通ジテ歐洲文明ニ對スル一ノ透徹セル批評ヲ試ミントシ 他ハ經濟學認識論ヲ題材トシテ著者ノ哲學思想ヲ開發セントス 其ノ目ザス處ニ多少ノ差異ハアリトシテモ 著者ガ之レニヨリテ披握セントシタル所ハ 共ニ滯歐數年其ノ文明ノ依ツテ來ル所 其ノ思想ノ湧キ出ヅル源ヲ探ラントシタル努力ノ結果ナルニ於テ其ノ揆ヲ一ニス。日本經濟學界

ハ歐洲文明ノ一般並ニ其ノ一タル學問トシテノ經濟學ガ 大西君ノ頭腦ヲ通ジテ如何ニ解釋セラレタルカラ知ラントスルニ於テ少カラザル興味ヲ有ス。二著ハ此ノ目的ノ爲メニ遺憾ナク材料ヲ提供シタルモノトイフベシ。

先ツ「伊太利の旅」ヲ讀了シテ得タル余ノ感想ヲ卒直ニ茲ニイフコトヲ許サルレバ 著者ハ一個ノ文明ヲ考察スルニ際シ 餘リニ智的解釋ニ待ツコト多キニ過ギザリシカトノ疑問ヲ抱カシメシコト是ナリ 是或ハ「總テヲ解スルニ依ツテ總テヲ許ス」立場ニ立タントシタル著者ノ用意ニ對シ充分ニ酬ハレタルモノトシテ著者或ハ自ラ満足スベシ只歐洲文明ノ批評ヲ聞カントスル吾等ニハ此ノ凡テヲ許ス態度ハヤガテ著者ガ一個ノ單純ナル Aufgeklärter ナリ 一個ノ懷疑論者タルニ終ルモノト思ハシムルノ遺憾ハ即チアラン人アツテ滯歐諸年後漸ク其ノ文明ヲ迎フルニ異國情調ヲ以テスルノ感止マントスル時 翻ツテ其ノ時以前ノ感想ヲ喚起スルコトアリトスベクンバ而シテ何物カラ題材トシ其ノ人亦同ジク其ノ「伊太利の旅」ヲ書クノ機會アリトスベクンバ 恐クハ大西君ノ新著ト畧々同様ノ述作アリ得ベキナラント思ハシムルハ 云フマデモナク是大西君ノ所謂「總テヲ許ス」立場ガ必ズ如何ナル眞面目ナル研究者ト雖モ一度ハ通過セザルベカラザル懷疑ノ時代ヲ意味スルモノナルコトヲ語ルニハアラザルカ。

余亦大西君ノ「伊太利の旅」ヲ讀ンデ謂ハバ餘所事ナラザルノ感ヲ抱キタルコトハ余自身ニトツテ少カラザル興味ヲ覺エザルヲ得ザリシ所以ナリト雖モ 著者大西君恐クハ本書ヲ以テ到底單ニ歐洲留學ノ一記念物トスルニ止メテ 終ニハ此ノ書ニ開展セラレタル思想ノ裡ニ永久ニ安住ノ愉快ヲ貪ルコト能ハザラン。一個ノ文明ヲ評スルニ當テ 主トシテ智的解釋ニノミ俟ツモノハ 畢竟

總テヲ許ス寛容ハ是アラシク而カモ一ヲ採ツテ他ヲ顧ミザルヲ熱
心ヲ湧カズ。此ノ熱ナク此ノ力ナキハ批評ノ透徹ニ遺憾ナキヲ得ザ
ル點ナルベシ。文明批評ハ科學ニアラズ。ペーとニぶらんハ分析
スベカラズ ろだん ハ記述スベカラズ。

「人年若ウシテ訪フベキノ國」伊太利ハ考フベキ國ニアラズ感ズ
ベキ國ナリ 何人カアツテ愛人ノ私語ニ論理ノ糸ヲ手繰ルベキ。

「伊太利の旅」ノ著者ハ才人 惜シムラクハ力ナシ。

熱ナクシテれもん花咲ク伊太利亞ヲ訪ハントスルハ 論理ノ峻
嚴ナクシテ獨乙ニ入ラントスルニ等シ 才人大西君伊太利亞ノ文
明ヲ味ハンニハ智アマリニ敏ク 獨乙ノ論理ヲ解センニハ情操ア
マリニ繁シ。「囚はれたる經濟學」一篇卷頭ヨリ卷尾ニ至ルマデ
其ノ題名ヨリシテ既ニアマリニ「伊太利の旅」的ナルニ過グ
ハ心ヲ以テスベキニ頭腦ヲ以テセントシ 他ハ頭腦ヲ以テスベキ
ニ心ヲ以テセントス。恐クハ是兩著ガ何等ノ結論ニ到達スルヲ得
ザリシ所以ナルベシ。只著者ガ此ノ二近著ノ中ニ表明シタル智識
ノ該博 情操ノ豊富ニ至ツテハ日本經濟學界ニアツテ全ク比儔ヲ
見出シ難シ。麗筆ヲ驅ツテ歐洲文明ノ趨勢 思想ノ歸趣ヲ擧グル
コト誠ニ縦横無盡 例ヘバ一際目ダツ美々シキ裝ヒノ若武者ガ
馬ヲ陣頭ニ進メテ東奔西走 寄せ來ル敵ノ真唯中ニ突キ入リテ左
ニ掃ヒ右ニ薙ギ立ツルノ面影アリ 凡手到底及ブベカラズ。絢爛
華麗誠ニ一代ノ才人タルニ恥ヂズ。 (下畧)

またまた立派に生きてゐる

名古屋高等商業學校教授

高島佐一郎

ほんとうにあれから根雪が三たび融けて 融けた大地からは若
草が三たび緑りにもねて自然をいろどりしましたけれども 小樽の
否なわが經濟學の文化の花床を一たびは濃く彩られた故大西教授
からは 再び精神文化の「五月の季節」がよみがへり來ないので
せうか? 明らかに 肯定の言葉で しばらくウォルター・スコ
ットのことは籍りるなら「まだまだ彼れは立派に生きてゐる!」
Et...cette bete-la est Vivante...! といふやうな言葉で それに答へ得
られることは まさしく 私ども彼の友達彼れの近親の方々の悦
び慰めであらねばなりません。それは現に 啓明會同人の美はし
き友情乃至は敬慕の情の表現である此の催し自體の亦た論證する
ところなのです。けれど 事實は それよりも遙かに遙かに大き
く廣く甦へり居り 現に深く精神的活動をされてゐるのであります。

これを短く例證しませうなら このほど復活せしめた私の一著
作中に (「改訂増補 金融 經濟の諸問題」) 彼れの業績にかゝる舊稿の一部分を
採録しましたところが 私の讀者の或る人々は 其の小篇よりし
て 彼れの論策に對する新たな敬慕感激の泉を見いだしたと言
てくれたのです。否な わざわざ私の筆を通して彼の生動のすが
たを描く必要は毛頭ないのでありまして これは彼れ自身が明白
に語つてゐるところなのです。その主著「囚はれたる經濟學」及

び傍著「伊太利亞の旅」自體が いまだに 相當多數な讀者を惹きつけてゐるのでありますから。

(二)

「十分なる生動」その業績にかゝはつて三年前に私が用ゐた此の語の眞實さを傳へるため暫く 他の角度から この事を眺めてみませう。私は當地で 得がたき心の一友を恵まれてゐるのであります。——その友と申すのは今 獨乙で 故兄が歩んだのと同様同じ道を道うてリツカアト フツサアル シユタムラアらの思想に沈潜してゐるA君を指すのです。——彼れは二年前故兄と同じ病を得たのです。試みに「二月八日 大西教授の命日三首」と題した彼の詠草をたどつてみて下さい。

こぞの今日われと病を同じくし逝きてし鬼才一目を閉ぢて想ふ
天馬ゆく思ひにたけし才人の 故兄にし病神のねたみてしやも
凡庸のわれゆゑ神はあはれむか 熱やゝ下り今日こゝろよし

このF博士門下の一逸足の歌の心 またこれを引いた私の心
それをたどたどしく説く要はないでせう。けだし それは 往年「伊太利亞の旅」の話を聞きながら北海ホテルの夕を短しとせられた同人の懐ろに おのづと滲みいるのに相異ありませぬから——たゞ平凡に一語しませうなら 彼れの思想の高所から流れ下つた奔湍は 恐らく次ぎ次ぎに又た遠く遠く此れら後とより來れる高材のこゝろごころを感激させる さうして謂ゆる思想連續乃至は繼承の理法に従ひて まだまだ長く彼れの業績を若返らせ擴充させてゆくのに相異ありませぬ。

(三)

白さて 假問せられた「その學問上の功績」については 前年にしたゝめた拙文のなかで 私の考へは盡されてゐます。たゞ此處

で一言すべきは 彼れの發表せられた經濟學方法論乃至は經濟學思想史論上の業績を批判するのには 今日達成せられた斯學の立場又は態度よりして試みられてはならぬ 言ひ更へるなら五年前の我が斯學の立場よりして 又は當年の經濟學社會思想の態度よりして爲されねばならぬ と云ふことでありませう。かく解しますなら 斯界における開拓者の一人としての彼れの功績は ながく感謝せらるべきものであらねばなりません。で 今はその二の問ひ「追憶の一二」へ進むことにいたします。

まづ 神戸のT博士の推舉で今度S博士の指導室にはいつて來たやつはすごいぞ と同學の連中を張目せしめた頃の追憶は 凡そ士五年前に遡つてのことです。「ラツサーレ」に「獅子の瓜」を見 そうしてマルクスに「冷かに閃く蛇の目」を見た」とは會つてメーリングの評した言葉なのですが 此の闘搏力と此の理智力とは勿論 より小規模なものでしたらうけれども 私どもが既に當年の彼れの意思力 頭腦力において共に之を見いだしたころのものでした。しかし その獅子の瓜と蛇の目とは 一橋二年の學窓にては深くもどうかいせられ そうして彼れは専らその自からの衷ちを養はれたやうでした。

しかも それらが小樽に赴かれてから 時に應うて謂はゞ小出しに發揮せられたとは 私ども東京に居つたものゝまゝ 傳承したところなでのした。この強さ鋭さが漸く全體としての圓熟さのなかに鍊入せられ 渾然とした一人格を成し來られたのは 雪の獨逸から霧の英國へ 更に流水の美しい佛蘭西を経て淺藍の海と空とに恵まれた伊太利亞へと云ふ幾巡歴を重ねるのに従うて 層々にその著しさを加へたやうに見えます。それは 世界ところどころから受取られた彼れよりの信書が證據だてゝゐたのです。實

際 ウィスコンシンの水都マディソンに迎へられた彼れは 私には 別人として映つたのでした。そして宵を徹して語り合ひ とうとう隣りの家から電話で抗議を申込まれて初めて寝についたのが夜も白む頃だつたのは 今も思出深い記憶になつてゐます。それから 私どもが屋を隣つて住うた小樽二年間のこゝろよき交友の追憶こそは 終生忘れることの出来ぬものゝ一つでせう。さうして その高潮したときに私は小樽を去つた その折のこと 電報を披いたまゝ呆然と W博士と夜おそくまで語り合ひつゝ心のなかに泣けて仕方のなかつたのも その最後の悲壯のためのみではありません。私どものフロイドシャフトは層々に深化していつたのでしたから。

(四)

Sein Werk bleibt Torso! 彼れの業績は さながらのトルゾーであつたのです。彼れは實に 學の一方性 Einseitigkeit と云ふ概念を大きな指南車となしつゝ 經濟學思潮の推移發展を極めて巧みにデアレクテイツシに描きだされましたけれども その研究對象自體が一層鮮明に辨證法的に展開し來つたところの經濟生活の歴史の研究を以て 其れを基礎づけることなく 更らにその到達し得た現代經濟生活の理法を組織することなしにあはたゞしく逝かれたのです。でありますから ヴキルブランドがマルクスの業績を評した右の言葉は 故兄の場合に移されて一層よく當てはまるものと言はねばならず 一層直截に言ひませうなら 寧ろラツサーレの事業の方に似てゐるものでありませう。さうして 人々の彼を愛惜してをかぬ事情の一つは まさしく此の間の消息にも横たはつて居ることゝ思はれます。

しかし よし手足のない胴體の寫像でありませうとも 彼れの

學問殊に經濟學業績における將來 少くともその近い將來は 之を忖度することが不可能ではありませぬ。何故となら 彼れは可なり歴史哲學に通じ經濟史を攻め又た論理家でありましたけれど 之を經濟純理構成の補助手段たらしめた場合には 歴史史實の多様性からして自からの頭で よくその一様性だけを抽きだし 之を辨證法的に考察し表現し得る強みと傾向をもつて居られたのですから——一言で之を表はせばこの點 彼れはリカルドウ的なのでしたから——。かやうに既に リカルドウ的ならば 他日組織さるべかりし經濟學構成は恐らく——しばらく既成學派の分流に従うていへば——新歴史派からは益々はなれ却つて新正統派へ愈々近づくものであつたでせう この點はまた恐らく F博士の立場よりも一層 ネオクラシツシエであつたでありませう。

(五)

その經濟純理研究の將來は凡そ右様であつたであらうことと致してまして 次いで彼れの社會政策への將來は いかような道を歩まれたこととせうか? この問ひは必然的なものです。彼が「囚はれたる經濟學」に在いては 一言をすら之に費やさず「論壇が社會問題に獨占せらるるに拘らず 否 輕佻なる勞働問題さへ横行せる世なればこそ (此の種の書物の公刊は) 寔に焦眉の要求である」として 社會問題研究を若干軽くあしらつたやうな口吻がありましたとて爲めに この問ひを無用なりとなされては謬りです。この五年間に わが經濟思潮は 否なその思想の母體なる經濟生活の現實は幾度かの洗禮をうけいれてゐるのですから 彼れ 若し在られたなら その社會政策に對する態度には もつともつと眞劍味を加へてゐたのに相異ありませぬ。

いま 視角をかへて 彼が最高級の敬意を捧げて居られた一頃

學の最近業に現はれた擱筆の語を藉りまして 之を論證するのは やがて彼れに敬意を表する所以なりと思ひます 曰ふ 「經濟生活に現はるゝ」諸般の不調和を除去するに必要な各種の施設を研究するは 經濟政策及び社會政策の任とする所なり。されば經濟原論を學びたるものは 更らに 經濟政策並びに社會政策を學ばざるべからずと知るべし。」と。さうして之に關する書物の刊行を他日に期されて居られるのです。(福田博士「經濟原論」教科書「大正十四年」)之が さきにこの問題を必至的なりとした次第なのです。けれども 之を詳述するべく もう 剩された紙數と時間とがありません。

このゆゑに 輓近 社會政策が主もに 對抗せんとするマルキシズムの 又はそれにかゝる有名な言葉を藉りまして 之を片付ける戰術をどるほか今は致し方がありません。然らば 社會に對する哲學の任務を彼れマルクスはいかように考へたか 又經濟生活の發達と社會生活一般の進展との關係を彼れマルクスはいかように考へましたか。その一については その Die philosophen haben die welt nur verschieden interpretiert, es kommt aber darauf an, sie zu veraendern. の語が代表的なものでありますしその二については Die produktionsweise des materiellen Lebens bedingt den sozialen, politischen und geistigen Lebensprozess ueberhaupt. がその全思想の指南車とせられてゐます。で故兄は 之について抑もいかなの見解をもつて居られたか?それは 明白であつて 殆ど全部的な否定なのです。

その否定といふた所以は その一に對してはヘーゲルに従うて彼が嚴格に Die Eule der Minerva beginnt erst mit der einbrechenden Daemmerung ihren Flug. の埒を超えまじとなしてゐたからでありますし その二に對しては修正されたカントのごとき立場 假り

にアドラアの語でいひ表はせば Das Ideelle ohne das Materielle ist wirkungslos, das Materielle ohne das Ideelle ist richtungslos. の考へをもつてゐたからであります。で今 彼れ自體の表現方法に倣うて之を約づめて言ひきりますなら その社會進化觀は Revolution の更なるをもとつた evolution で終始せんとするのに在りました。然らばすなはち其處には「その時代時代の現實を思想で把握した」社會政策論が 彼れの將來の口から また筆から力強く流れ出たに相異ありませんまい。

(六)

この恐らく社會革命 social revolution を斥けて社會進化 social evolution で行かうとする彼の志向は その思想の發展を辿つてみますと 可なり久しいものであるのを見出します。彼れは一橋を出るとすぐ 今は伯林大學に輝いてゐるゾンバルトの「猶太人と近代資本主義」の要領を發表したのです。同じく猶太系から出た卓越した思想に影響されたのに致しましても 彼れがマルクスから益々離れて而してゾンバルトのに近づいていつたのは 必ずしも彼れの箇人格から歸納せらるべきではないのです。却つて彼れがマーシャル流に箇々人の本性の深みを洞察したばかりでなく ゾンバルトの如くに 經濟生活の機構及び作用の現實を直視し凝視した結果である と看らるべきであります。マックス ベアはヘーゲルの論理と信念との矛盾を説いて曾つて「その國民的感情が辨證法論者をうち負したのだ」と申しましたが 彼れの場合にあつても その祖國の國民經濟的使命要求にかかはる感情認識乃至は欲求が 大西といふ一辨證法論客を征服しをはつたといひも得られるでせう。でありますからある獨逸學者が近く ゾンバルトを「水を混ぜたマルクス」と評したその筆法でゆきますと

彼れ故兄は 差しあたり正しく「水を混ぜたゾンバルト」となる譯けなのです。さうして私どもはF博士の謂ゆる國民經濟の現象作用に現はるゝ「諸般の不調和を除去するに必要な各種の施設を研究する」ところの我が社會政策の研究といふものが 彼をミツヌした大なるものあるのを 今だに愛惜しいものに思はれますのです。

をはりに 設問の最終のもの すなはち彼の將來のよりして何を希望したか が来る筈であります。實は以上もて大約それにも答へ得たかとも思ひます。しかしその將來を揣摩するのは 少くとも彼の性格にとつては無用なではありませんまいか。實際自から或る機會に引用した「生を知らず何ぞ死を知らんや」を實踐したのが彼でありましたし また 現在に強く生きよう 然らばより有力な將來の生命力はおのづと辨證法的に展開されてくるのだ とヘーゲル流に人生を觀たのが彼でありましたから——ですから この點について このダイアレクテイッカアを追憶するこの文は 世界の思想史上 最大のダイアレクテイッカアである人の一句を藉りまして結語たらしめるのを 妥當であると信じます。すなはち ゲオルグ ヴェルヘルム フライドリヒ ヘーゲルは曰ふ「あらゆる將來的のものは絶對的でない」

東京中野にて最近親二人の健在であるを悦びみて歸名した翌日

(大正十四年二月二十五日)

思ひ出すことなど

高田治作

大西さんが専門の經濟學に對する博覽強記だつたこと 更に哲學に對する造詣深く 理解の鋭かつたことも その著述なり講演なりに接した人の 誰でもが肯定する處であります。それに行くとして可ならざるなき潑刺たる鬼才を緯さして 自家の學問の基礎を築き上げて行かふと されてゐた 功業の中途に斃れたことは惜しみ盡せませぬ。文章に就てもさうですが 殊に講演の巧妙さは一寸追従を許さぬ趣きがあつてあの修辭の妙 逆説の辛は たとへば音樂に酔つた時の感じにも似た 陶酔感に聽衆を惹き入れずには措かぬのでした。左右田博士の云はれる如く「感すべき伊太利を理解せん」さされたり。或は福田博士の「學問の幅を廣くするに貢献せるも 幅が廣過ぎて 奥行き之に伴はぬ」とする憾みは高い批評眼からは 眼立つたかも知れませぬが まだ若かつた大西さんに私達は敢て完璧は望まうとは思ひません。眞實にさうした若さが持つ缺陷なり 或ひは瑕瑾なりを持つた儘で グンケン押して 屹度行く處へ迄 行き着く人だつたと思はれてなりません。

何時か「丸嚮の眞理」かを書いてゐられた頃慙んなものは今の内にどんどん書き散らして置かぬと 段々書けなくなるから」と云はれたつた事を記憶します。それは自分の學問の体系が出来上つて來ると 傍見をしてゐる暇なぞはなくなるから 云ひたいこと 腹に溜つてゐることは どんと吐き出して終ふに限ると云つた氣持で 幾篇かの文明批評風な論文 餘技的な感想をものされた様に記憶します。我々素人にはそれがとても愉快でした。

先輩の方々にまた何か云はれるな 位のことば萬々承知の上で それでもあちこちから批評が來たり 共鳴者があつたりすると 愉快さうに哄笑されたり 皮肉さうな苦笑を漏らされたりした面影が 未だに眼に見えます。

「日本の經濟學者と文學者」をいふ演題で小樽啓明會で初めて講演をやられた時 一流の雄辯で經濟學界の鳥瞰的觀察をされた後で 文學界の現況に及び 藤村 花袋

荷風諸家は申す迄もなく 谷崎純一郎 有島武郎 武者小路實篤 或ひは倉田百三等に至る迄實によく當時文壇の所謂新作家の作品に注意深く博讀されてゐるのには すつかり感服したものでした 谷崎の浪漫的耽美主義や 有島氏の物の觀方を 舊來の東洋風な諦觀とは全然異なつて 人生に對する執着の強さ 即ち西洋風の物の觀方なりとされた点や 武者 倉田の人道主義的立脚地に對する觀察など 實に専門家の見てあるに驚いたものです。經濟學界は名を成すには遅いが 一度名を爲さば その名聲は決して文壇の如き短命であり得ないとして 文壇人の學問の不足 見聞の狭少 外國留學の機會尠き等に原因最も多く 且つ一般讀書界及文壇が ギャーナリズムに煩はさるゝ事尠からざる点などを指摘された様でした。

×

文學的な趣味では随分ディレツメントであつたらしいことは シュニツラアが非常に好きであつたこと ホードレルやベルレーヌもよく誦された話を聞いたが 私が佛語をすこし初めたと云ふ話からホードレルの「惡の華」を是非讀めと云つて貸して下さつた さう云つた親切さは忘れ難いものであります。

日本の耽美派では 永井荷風氏が餘程氣に入つてゐたらしく どうしても荷風論を書いて見ると云つてゐたのが 果されなかつたやうです 遺稿の中には随分歐洲の作家の批評等があるとのとですが まだ出版されぬのが遺

×

外國物のレコードの演奏會を私達が開いた時に 奥さんと二人で来て下さつて ピエーのカルメンの華麗なオーケストラを聞いてゐるさ そちこちで觀たオペラの舞臺が眼前に彷彿とすると云つてゐられた。よほどカルメンが好きの様で これ位キレイなオペラは恐らく先づ無いと云つて賞讃されました。

「ベートウフェンは僕等ではさへどうもびつたり分らないかられ」と云つて ベートウフェンの曲ばかり集めた會の時 「一般に受けぬのは無理もないよ」などと笑つて話されました。

「ピアノはどうも 分らないれ 聞いてるさキレイはキレイだけれど」なぞとも云はれた。

音楽ばかりでなく 美術の鑑賞の勝れてゐられたことも 驚くばかりで あの犀利な理性の鋭さが 感覺の方に火花を散らしたなら とても小氣味のいゝ藝術批評家にもなり得られたらうと思はれてなりません。(終) 14-2 25日

もつと大きな

仕事をやらせ度い

三菱商事紐育支店長

上野福三郎

——(前略) 神戸高商卒業の前年 僕は折悪く大患に罹つた。其時病床を訪れた大西に「君か僕が首席を取らなくては 京都商業の名折れだ だが俺は病氣で駄目だから君大に勉強しろ……………」と言つたが僕の一言に刺戟されたのか どうかは知らんが 二人分勉強した大西は立派に一番で卒業した。卒業論文は例の帝國主義論で 津村博士のレクチュアによつて始めて日本國民としての自覺を得たと書いてある。

學校を出て僕は三菱へ入ることになつたとき「是からの實業界にその位の學問では足りないから 貴様も一處に専攻科へ入れ」と大西が勧めたけれど事情が許さなかつた。大西が専攻科を了へて赴任したのが小樽の高商で 僕が門司に居つた頃洋行した。獨逸に留學の最中戦争が始まつて 大西は命辛々倫敦に逃げ佛蘭西に渡つた。南歐に過した半歳の生活は その詩人的才筆をもつて滑らかにものされ 歸朝後上梓された「伊太利亞の旅」一冊に收められてある。

大西の態度には 親友を學問的に導かうと云ふ美しい温みが溢れて居た。僕が倫敦支店詰になつときいて ナボリの旅先から齎らした次の便りにもその親切が光つてゐる。

君が西洋に來た事はローマで初めてきいた。一度は是非來て置く必要がある事なり

それには早い方がいいのだから 早速賀辭を申述て置く。

出發前に坂西さんに會つて「洋行後の心得」を云ふ風なものでも聞いたのか知らぬ
或は聞いても先生云はなかつたかも知れないが 聞くにこした事はない(中略)一最
も読んで面白い人間はバーナードシャウだと思ふ が果して君にシャウを面白く感
ずる思想の傾向ありやを僕は知らない。神戸を出てから殆ど會はないのだから その
思想の發展の方向が最早僕には分らないからなり。最も注意すべきことは英國で面
白く感ずる思想家例へば ラスキン ハイロン カーライルオスカーワイルド シ
ャウ等は殆ど總て反英國的思想家にて 日本の若干の思想家の如く是等の人々の
思想が 英國の輿論なるかの如く考ふるは根本的誤解なる事なり。英國の根本思想
は何れを云つてもシェークスピア 新しくはディッケンズ位にてあるべし 斯ふ
云ふ背景をわいた舞臺に ラスキン等が飛び出してこそ意味があれ ラスキンだけ
離して讀んでは何にもならない。哲學的に云はば ベンタムが英國の最大の代表者
たる可く 其後の思想の變遷はベンタムを中心として或は之につき或は之を離るゝ
處に意味あるものなり (中略)——少くとも英國に居る以上はせめては英國の思想
界の潮流位には始終注意して欲しい。(中略)——シャウを讀んでも讀まなくつても
君の月給が一磅上るか下るかの問題には關係はない。然し月給許りで人間が左右さ
れるものとは僕は思はれない。英國一般の狀況は 僕は「タイムス」を毎日精讀し
て成効した様に思ふ。(中略)——僕は行つたことはないがロンドンスクール オブ
エコノミクスは色々立派な學者が居るさきく もし暇があるなら何かをきいて見給
へ——もつと並べても好いが疎遠と笑はれてもつまらぬから 之だけにしてやめて
置く。

人間は見やうが違ふから あまり他人の意見をきくま却つてうまく行かない事があ
る。(下略)——

僕にラッセルの本を紹介したのも大西である。天才的肌合に加へ
て鬭争的分子を多分に持合せてゐたので學生時代には人との折合
がうまくなかつたが 洋行後はそんな圭角も段々減つて來たし
學校では生徒の人望も聚め 結婚後は家庭の影響と云はふか 人
間もだいたい丸味を帯びて來たので 此調子だと益々彼の善い半面
が現はれて行くだらうと喜んで居つた。

×

大西には奮闘努力性があり 事務的ターレントにも秀でゝ居つ
た。エニシエテーブが豊富で 又巧みにトピックを掴まへる
單にプロフェッサーとして教壇に終らせず もつと大きな仕事を
やらせて見たかつた。

(大正12年2月5日 小樽新聞掲載 記念號追悼談話より)

編輯の後に

◆本號發刊の計畫が 遅滞きに失し 諸家に對する照會等も 匆卒
の間に行はれ 充分の時間をお與へ出来なかつた爲め 寄稿を頂け
なかつた向も不尠 且つ準備の時間なかりし爲め 故教授の知友諸
賢に廣く傳は得られなかつた憾みもあります。

が然し最初の豫定より 約五割も頁數の増加を餘儀なくせしめら
れる程 多くの寄稿を賜つた諸家に對して 深い感謝の意を表する
次第であります。

◆各方面の寄稿多く處定頁數超過となつた爲め 設備の充分でない
工場では豫定の時日に完成するを得ず 十日間發刊遅延となつたこ
とを詫言致す 併しながらその十日遅延が決して無意義でない
程内容が充實したのは 編輯者の竊かに悦びます次第であります

◆編輯を終えて今更故教授が 各方面から深く囑目され 熱い愛惜
の情を以て死を惜まれたことを 眼のあたり痛感します。更に在り
し日の舊い記憶を新にして 哀愁彌深きを覺えるものであります。

◆卷頭の遺稿は 關 一博士に宛てた 滞歐私信に添はられた作品の
一つ また筆蹟は遺稿「婦人問題概論」中の一節 照像は歸朝後の
ものの中 最も整版に適する意味で 輪廓 陰影の明瞭なるを撰び
ました。

◆名古屋高商渡邊龍聖校長 慶應大學教授小泉信三氏 小樽高商教
授苦米地英俊氏より都合あしく乍遺憾執筆不能の旨御通知に接しま
したことを附記します。(高田生)



須藤眞金著

四六版
無技巧装訂
挿繪五葉
全部横組
ポイント活字
定價180
送料 12

始めて試みられし
東西建築ロマンス集

建築物語

第二版

「建築物語」は 建築學術の研鑽と文學及史學の攻究に没頭せる 我國稀に見るユーモリスト須藤眞金氏十年の蘊蓄が 鬱積醗酵せし産物にして また實に 科學と藝術とを空間に渾然と融和結晶せしむべき 天才的建築家が建築と文藝と史學とを溶きまぜて 絢爛たる彩筆をほじまいに揮ひたる 日本文壇未聞の著好であり **ユモレスク** の代表作である。

その印刷は 國字横組運動の急先峯たる東京出版會社によつて 全部横組ポイント印刷を斷行されたる 漢字出版界の一大警鐘である。

建築と云ふ深遠幽妙なる殿堂を 流暢華麗なる筆致を以て描き 横組ポイント印刷を斷行せられたる本書は 典雅なる建築趣味の渴仰者に傳奇的なる歴史物語の探求者に 混沌たる國字問題の研究者に 初めて満足の陶醉を與ふるものなる事を斷言する。

出版元 東京出版株式會社

—賣捌所—

小樽市相生町一丁目一 北方日本社 振替貯金小樽10595番

國字横組運動

規約は別に設けません。會費も從來の通り無料で押通し 運動の費用は全部寄附金で支辨して行きます。寄附金はナミナ協會のものと同じく一般篤志家は勿論 貴族や富豪からのものでも快く御受けしますが一口壹萬圓以上のものであれば 協會の評議員會に諮つた上で 無いと御受け出来ない事にして居ります。寄附金の送金通知には必ず横組運動寄附金と明示して ナミナ協會への寄附金との混同をさけて頂きます。明示のない寄附金はナミナ宣言による他の運動にも使用される事になるからです。

加盟するには只「横組運動加盟金」金五拾錢を協會の振替貯金口座(新に小樽局へ開いたもの)に振込んで下さるだけでいいのです。協會では直様それを國字横組運動連名簿に記名して 國字横組論の概念」一部と横組雜誌一部とを 無代で御贈りします。そして若し御勧誘などのために「國字横組論の概念」が御入用の場合は 所用部數を貳拾錢の認合にして 寄附金の形式で協會の振替貯金口座へ「横組運動寄附金」及「國字横組論の概念何部入用」と御明示下さい。加盟金及此種の寄附金に對しては 發送を以て領收書に代えます。尙横組研究資料として引續き横組雜誌(東京出版會社發行の「WOMENA」と「東京人」 雜草社發行の「雜草」等は何れも休刊して居ますが 北方日本社發行の「北方日本」は 震災に遭はないで健在)を購讀なさる場合や 單行本御入用の場合は 協會でも喜んで御取次しますから それぞれ協會の口座へ御振込み下さい。

ヲミナ協會

小樽市相生町一丁目一 北方日本ビルディング内
振替貯金小樽5712番